第２節　伝統的家屋と寺社建造物

１．伝統的家屋の特徴：地域性と町並みの特徴

(1) はじめに

佐渡島は、西日本からの文化も交わる独自の地域文化を形成している。地元史誌はこの点を強調し、「佐渡は日本の縮図である」という[11]。この指摘は、町家についても当てはまるように思えてならない。佐渡では町家形式が多様であるし、新潟県本土で卓越する妻入町家（図６―３２）が佐渡では少数派で、平入町家が優勢である（図６―３３）、という事実からして、新潟本土とは異なる佐渡町家独自の建築文化と歴史性を感じさせるからである。

とりわけ佐渡市相川市街地は、佐渡島内の町家と町並みの歴史性とその特質が凝縮されている。相川は、相川金銀山の鉱山町として近世初頭に成立し、段丘上に形成された上町（以下、相川上町）と、海岸沿いに広がる下町（以下、相川下町）がそれぞれに発展した。現在でも歴史的建造物の残存率が高く[12]、古い町並みがよく残る地区と評価され[13]、佐渡の町並みを検討する上で重要地域と目されている。

特に、佐渡奉行所から金銀山に至る上町地区は、平屋建を主体とする階高の低い町家が並び、島内の他地区と異なる景観を残して注目される（図６―３３参照）。

また、佐渡市赤泊は島内において妻入町家を有する数少ない町並みとして注目され、相川などとはまた異なる歴史性と町家の系譜を思わせる。

佐渡島内における既往の町家調査としては、西村らによる建築計画・空間論的な調査研究がある[14]。一方、建築史からの調査は早期に重要伝統的建造物群保存地区に選定された宿根木地区[15]を除けば手薄であった。相川については、文政９年（1826）の「相川町 町墨引」に基づく当時の都市構成を検討したもの[16]と、伝統的建造物群保存地区対策調査があるが（1993 年度）[17]、後者は町家についてはサンプル調査に留まっている。赤泊については建築史的なアプローチは、管見ながら、みあたらない。

そんな状況下で、2010 年度、大場らは相川上町、及び両津湊の町家調査を独自におこない、両地区を比較した[18]。その成果が本研究の発端となった（図６―３４）。

本論は、相川上町と両津湊地区を起点に、島内の町家

図６―３２　新潟市白根地区の町並み

図６―３３　佐渡市相川地区上町の町並み

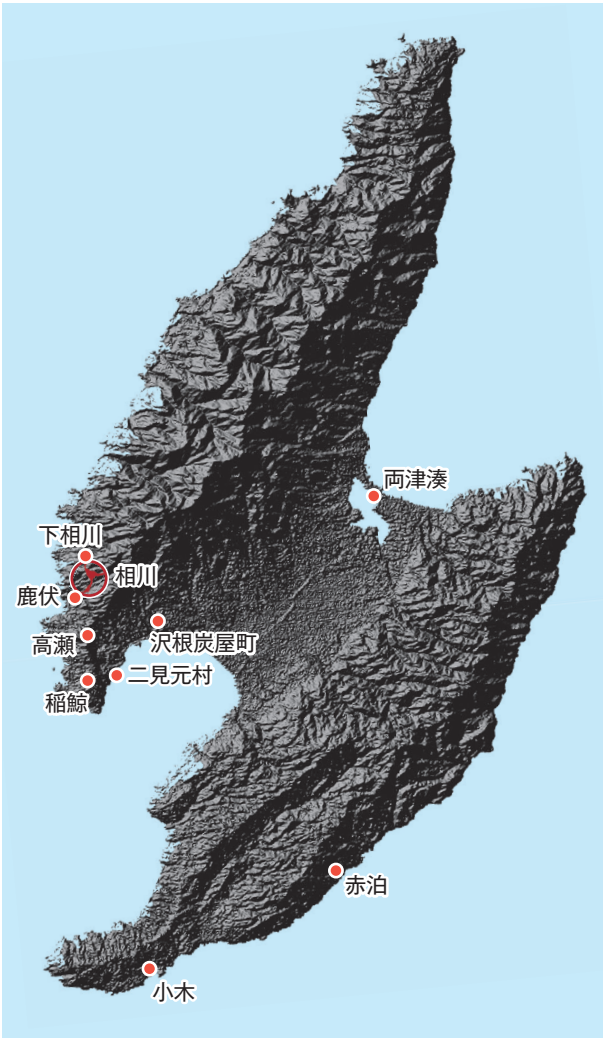


図６―３４　佐渡島調査地区位置図

遺構を可能な限り調査し、各地区の歴史性を踏まえつつ、農家住宅との関係も含めて系統的に検討する事で、佐渡の町家とは何なのか、その実相を明らかにする。

その知見は、広く日本における町家建築を再考する重要な契機となるであろう。佐渡島という小さな窓から、日本の町家が見渡せるような感触が筆者らにはある。

今なぜ佐渡の町家なのか、単に未調査地であるからではない。佐渡を通して日本の町家のローカリティー（地域性）とユニバーサリティー（普遍性）の関係が浮き彫りになるとの期待がある。

(2) 研 究 方 法

本研究では先行調査の成果を前提に、２系統の作業を同時に進めた。第一に、まだ未調査の相川下町地区を始め相川周辺地区、赤泊等における伝統家屋の建築構成とその特徴を実測復原調査によって把握した。

具体的には、相川下町地区において 13 例の町家を新規に復原調査し、相川周辺地区では 12 例の農家や漁家を含む伝統家屋の復原調査を実施した。赤泊では８例の町家を調査し、同時にその関連調査として小木、さらには日本海を挟み赤泊の対岸に位置する新潟県本土の寺泊や出雲崎地区などで数件の家屋を調査した（図６―３５、３６、表６―２～４）。

第二には、相川郷土博物館に所蔵されている２つの台帳に注目した。明治 20 年（1887）の「建物台帳」[19] と、昭和４年（1929）の「家屋台帳」[20] である。台帳とは、当時国や県が徴収していた地方税に付加して市町村が徴収した「戸数割付加税」もしくは「家屋税付加税」に伴う客観的な賦課算定基準を得るために作成されたものだと推測されている [21]。

明治 20 年の「建物台帳」には，各家の宅地面積と地価、家屋規模、本家（以下、主屋と呼ぶ）と納屋などの種別・配置図等が記載されている。同帳には同 20 年以降に提出された変更届も添付され，届出者名と届出期日、変更があった宅地面積、家屋の構造・屋根材・建屋種別・建坪、図面（配置図）等が記載されている（以下、変更届を含め「明治 20 年建物台帳・添付史料」と呼ぶ）。

一方の昭和４年「家屋台帳」には、宅地面積、土地等級、土地賃貸等級、家屋等級、家屋規模、住宅（以下主屋）や納屋などの種別、屋根材、建坪と配置図などが記載されている。

相川における戦前期以前の町並みを概観するに、これら台帳は好個の史料群なのである。

本論は、まず台帳の検討を手始めに、相川の町並みの全体状況を遡及的に把握する。

(3) 台帳からみる相川上町の町並み

ｉ) 軒数と土蔵の状況

相川上町は、初代の佐渡奉行大久保長安により、鉱山と奉行所を結ぶ計画的な町割のもとに形成されたとされ、金銀山に近い場所に位置する大工町に、奉行所おかかえの大工（坑夫）を居住させたことに始まる、と伝える [22]。一方、奉行所の近くに位置する町が京町である。京町は京呉服を扱う店があったことからその名が付いたという商人町で、３町にわかれ、大工町に近い上京町から、中京町、下京町と続き、下京町は奉行所最寄りの町である。

本稿は、相川上町において明治期と昭和期の台帳が揃う大工町と下京町をとりあげた。ともに鉱山町の一角を構成する町であるが、大工町は鉱山労働者の、下京町は商人の町として発達したとされ、町の属性と歴史性が異なるようである。

両町の家数の変化は対照的で、下京町では、明治 20 年「建物台帳」の 27 軒に対し、昭和４年「家屋台帳」では 21 軒とやや減じた程度であったが、大工町では、その間に 83 軒から 48 軒へと大きく減少した。

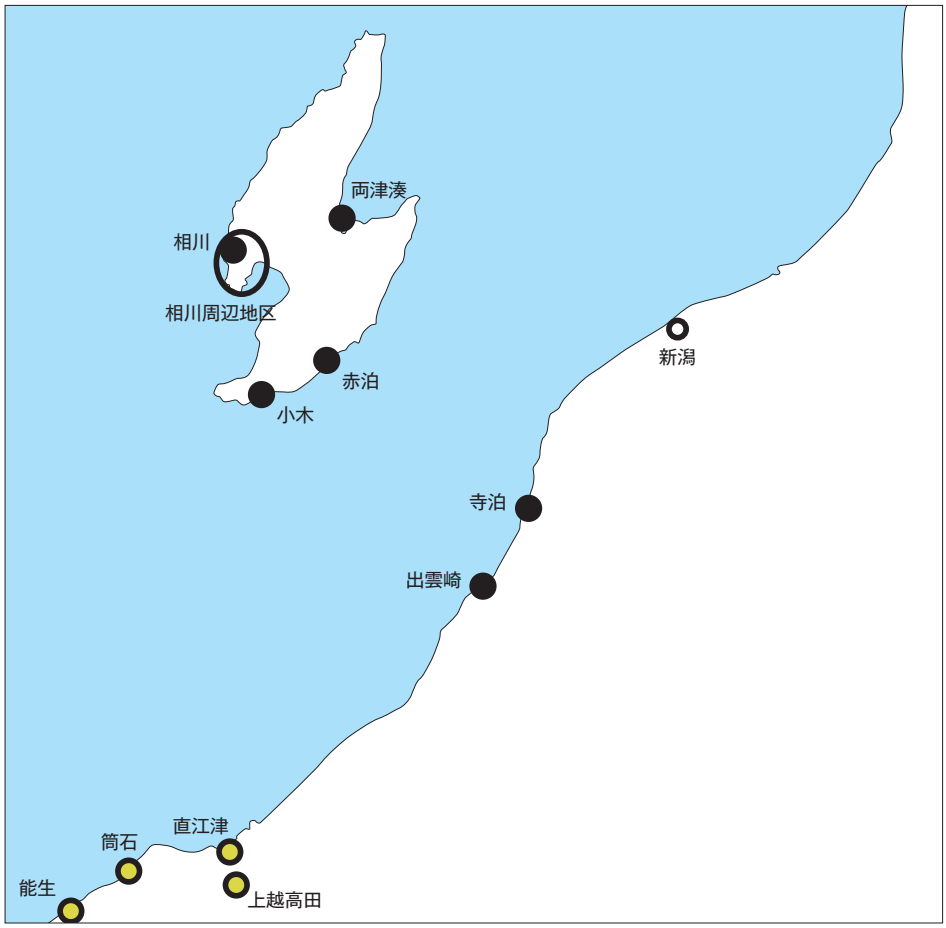


図６―３５　調査地区位置図（●：調査を実施した地区）

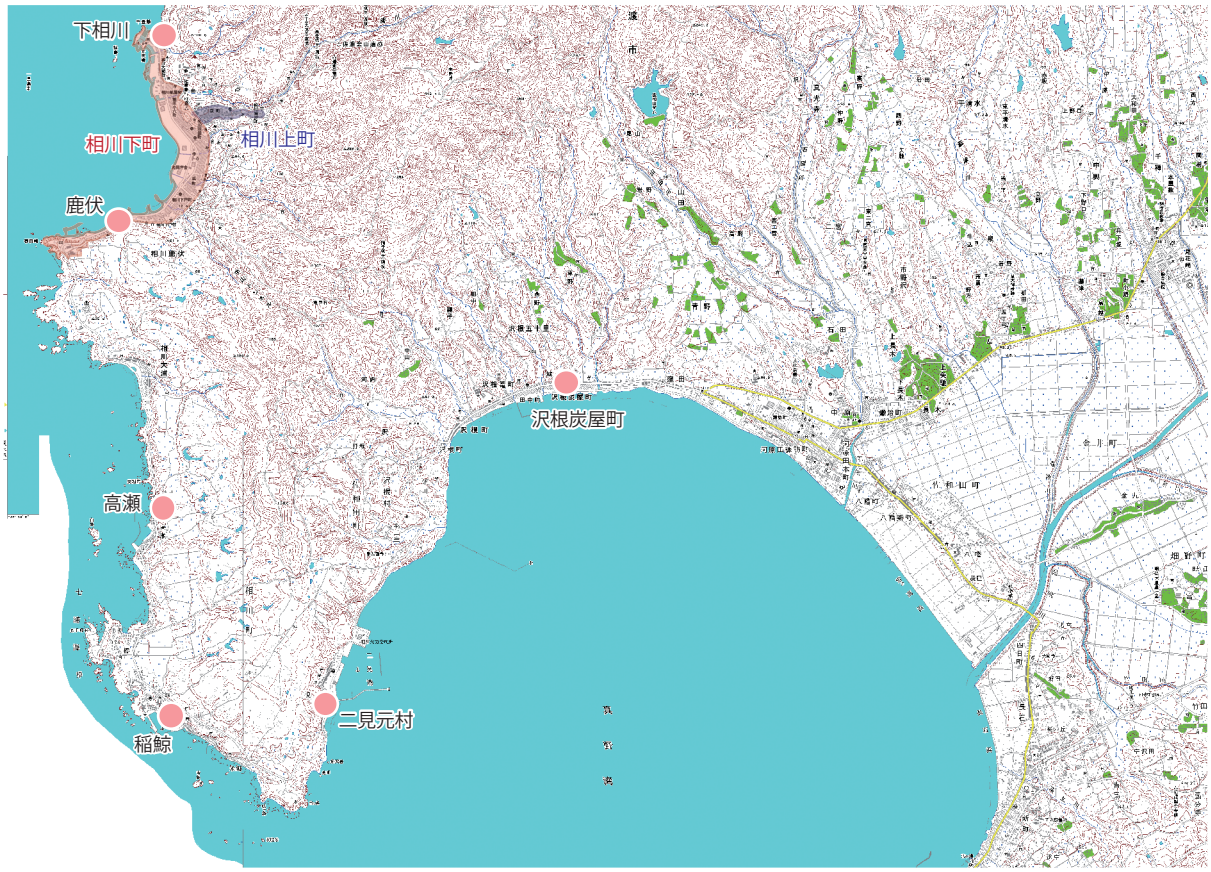


図６―３６　相川市街地及び周辺地区の位置図

表6—2　調査家屋一覧（1）

	家屋名	所在地	主屋									屋根								オエ												蔵
			建築年代	建築年代の根拠	妻入／平入	階数	軒高	棟高	間口	奥行	二階座敷の位置	オエに対してナンドの位置（復原）	現状の屋根葺材	現状の屋根勾配	屋根葺材の変更の有無	屋根の改造の有無	当初の屋根葺き材	当初の屋根勾配	屋根葺材の変更年代	年代の根拠	天井高（復原）	天井意匠／当初	広さ／当初広さ〔帖〕	トオリニワ上部の明かりとり		見下ろす窓	渡り廊下の有無	回廊の有無	座敷飾			蔵の有無
																								天窓	妻壁の窓				仏壇	床の間	神棚	
両津湊地区	Ｋｉ家	両津湊	18世紀後期？	部材	平	1	2,930	5,142	2.75間	7間	—	上手	瓦	3.3	○	×	板葺石置	3.3	不明	—	3,335	棹縁	10	○	×	—	—	—	×	×	○	×
	Ｋ店	両津湊	江戸中期	霊簿から推定	平	1	3,058	5,013	3間半	6間	—	上手	瓦	3.1	○	×	板葺石置	3．1	不明	—	3,553	棹縁	8	×	×	—	—	—	×	×	○	×
	Ｔｋ家	両津湊	北喜一家に継ぐ遺構	部材	平	2	3,763	5,456	4間半	7間半	表	上手	トタン	3.1	○	×	板葺石置	3.1	不明	—	2,653	棹縁	7.5	×	×	×	×	×	×	×	○	×
	Ｏ家	両津湊	文化６年（1809年）	普請文書「萬ふしん帳」	平	2	4,296	5,874	3.25間	8間半	表	上手	瓦	3.0	○	×	板葺石置	3.0	不明	—	3,070	合板	7.5	○	×	×	×	×	×	×	○	×
	Ｉ家	両津湊	19世紀前半	尾潟家から比定	平	2	4,550	6,363	3間	8間半	表	上手	瓦	3.0	○	×	板葺石置	3.0	不明	—	3,994	棹縁	7.5	○	×	×	○（後補）	×	×	×	○	○
	Ｓｃ家	両津湊	幕末から明治初期	部材，家屋構成	平	2	3,956	6,492	4間	9間	表	上手	瓦	3.7	不明	不明	—	—	—	—	4,029	棹縁	10	○	○	○	×	×	×	×	○	○
	Ｔｓ家	両津湊	明治中後期	明治21年地籍図中村家から比定	平	2	4,343	7,288	4間	8間	表	上手	瓦	4.0	×	×	—	—	—	—	4,221	棹縁	6	○	○	○	○	×	×	×	○	○
	Ｙ家	両津湊	明治末期～大正期	聞取り	平	2	4,401	6,317	3間	9間	表	上手	瓦	3.6	○	○	板葺石置	不明	不明	—	3,911*2	無し	7.5	○	×	×	○	×	×	×	○	×
	Ｎ家	両津湊	明治最末～大正期	推定	平	2	4,892	7,881	5間半	8間	表	上手	瓦	4.7	×	×	—	—	—	—	4,601	棹縁	10	○	×	○	○	○	×	×	○	×

	家屋名	所在地	主屋									屋根								オエ												蔵
			建築年代	建築年代の根拠	妻入／平入	階数	軒高	棟高	間口	奥行	二階座敷の位置	オエに対してナンドの位置（復原）	現状の屋根葺材	現状の屋根勾配	屋根葺材の変更の有無	屋根の改造の有無	当初の屋根葺き材	当初の屋根勾配	屋根葺材の変更年代	年代の根拠	天井高（復原）	天井意匠／当初	広さ／当初広さ〔帖〕	トオリニワ上部の明かりとり		見下ろす窓	渡り廊下の有無	回廊の有無	座敷飾			蔵の有無
																								天窓	妻壁の窓				仏壇	床の間	神棚	
相川上町地区	Ｉ家	大工町	19世紀前期	部材	平	1	2,988	5,274	3間	6間	—	×	セメント瓦	3.9	○	○	板葺石置	不明	明治20年～昭和4年	台帳	3,030	棹縁	4.5	×	×	—	—	—	×	×	○	×
	Ｓｕ家	中京町	19世紀前期～中期	平面構成	平	2（後補）	4,862	6,243	3間	6間半	裏（後補）	×	セメント瓦	2.9	○	×	板葺石置	2.9	昭和4年以後	台帳	2,271	根太	4.5	×	×	×	×	×	×	×	不明	×
	Ｓａ家	大工町	19世紀中期	推察	平	1	2,984	4,316	4間半	4間半	—	×	セメント瓦	2.9	○	×	板葺石置	2.9	明治20年～昭和4年	台帳	2,775	棹縁	4.5	×	×	—	—	—	×	×	○	×
	Ｓｇ家	大工町	19世紀中期	推察	平	1	不明	不明	2間	5間半	—	×	トタン	2.9	○	×	板葺石置	2.9	明治20年～昭和4年	台帳	未調査	—	—	—	—	—	—	—	—	×	×	○	×
	Ｔｏ家	大工町	元治元年（1864年）	棟札	平	2	約3500	約6000	3間	6間	裏	×	セメント瓦	3.8	○	不明	板葺石置	不明	明治20年～昭和4年	台帳	未調査2.9m程	合板	4.5	×	×	×	×	×	×	×	○	×
	Ｓ家	八百屋町	幕末～明治初期	部材	平	2（後補）	4,492	5,510	3間半	5間半	×	×	セメント瓦	2.8	○	×	板葺石置	不明	昭和4年以後	台帳	2.5m程・2,005	棹縁・根太	3.5/6	×	×	×	×	×	×	×	○	×
	Ｔａ家	中京町	19世紀中後期	家屋形式（富田家から比定）	平	2	4,004	6,092	4間弱	6間半	裏	×	トタン	3.2	不明	不明	—	—	—	—	2,183	棹縁	6	×	×	×	×	×	×	×	○	×
	Ｋｕ家	米屋町	明治前期	平面構成	平	1	3,443	4,626	3間半	5間	—	×	セメント瓦	2.5	○	×	板葺石置	2.5	昭和4年以前	台帳	未調査2.8m程	合板	6	×	×	—	—	—	×	×	○	×
	Ｗ家	中京町	明治中期	平面構成（黒瀬家から比定）	平	1	約3500	約4500	5間	4間半	—	×	セメント瓦	3.3	○	○	板葺石置	未調査	昭和4年以前	台帳	未調査2.7m程	棹縁	3	×	×	—	—	—	×	×	○	×
	Ｋ家	下京町	19世紀後期	家屋形式，部材	平	1	2,527	4,565	4間半	5間半	—	×	セメント瓦	3.9	○	○	板葺石置	3.2	昭和4年以前	台帳	未調査2.8m程	棹縁	4.5	×	×	—	—	—	×	×	○	×
	Ｔｇ家	上京町	明治末～大正初期	家屋形式	平	2	4,994	6,859	5間	5間半	表	×	粘土瓦（黒）	4.1	不明	不明	—	—	—	—	2,963	棹縁	8	×	○	×	×	×	×	×	○	×
	Ａ家	夕白町	不明	—	平	1	2,769	4,050	3間	5間半	—	×	セメント瓦	3.7	不明	不明	—	—	—	—	2,265	棹縁	7.5	×	×	—	—	—	×	×	○	×
	Ｆ家	中京町	昭和4年以前	台帳	平	1	3,593	6,137	4間	6間	—	×	粘土瓦（地瓦）	4.6	○	○	板葺石置	3.5	昭和4年以前	台帳	未調査3ｍ程	棹縁	4.5	×	×	—	—	—	×	×	不明	×

表６―３　調査家屋一覧（２）

	家屋名	所在地	主屋										屋根								オエ											蔵
			建築年代	建築年代の根拠	妻入／平入	階数	軒高	棟高	間口	奥行	二階座敷の位置	オエに対してナンドの位置（復原）	現状の屋根葺材	現状の屋根勾配	屋根葺材の変更の有無	屋根の改造の有無	当初の屋根葺き材	当初の屋根勾配	屋根葺材の変更年代	年代の根拠	天井高（復原）	天井意匠／当初	広さ／当初広さ〔帖〕	トオリニワ上部の明かりとり		見下ろす窓	渡り廊下の有無	回廊の有無	座敷飾			蔵の有無
																								天窓	妻壁の窓				仏壇	床の間	神棚	
相川下町地区	Ｉｔ家	下戸町	文化14年以前（1817年）	過去帳，部材	平	1	2,812	5,380	5間	7間半	—	上手	セメント瓦	4.1	○	○	板葺石置	2.8	昭和４年以後	台帳	2,660	合板／不明	8	○	×	—	—	—	×	×	○	○
	Ｓ商店	下戸町	天保９年（1839年）	棟札	平	2（後補）	4,834	7,432	4間	8間半	表（後補）	上手	粘土瓦（黒）	4.8	○	○	板葺石置	2.9	昭和４年以前	台帳	4,200	棹縁	8	×	○	×	×	×	×	×	○	未調査（当初○）
	Ｓｂ家	四町目	19C 前中期	推察	平	2	4,572	5,765	4間	7間半	表	上手	粘土瓦（黒）	2.6	○	○	板葺石置	2.6	昭和初期（昭和４年以後）	部材，台帳	2,939	棹縁	6（８）	×	○	○	×	×	×	×	○	○
	Ｔ家	小六町	嘉永５年以前（1852年）	祈祷札	平	1	3,071	4,797	3間	6間	—	×	セメント瓦	2.7	○	×	板葺石置	2.7	昭和15年	聞取り	2,700	棹縁	８＋座敷飾	○	×	—	—	—	×	×	○	×
	Ｏ家	大間町	万延元年（1860年）	棟札	平	2（後補）	4,300	未調査	3間	7間	×	×	セメント瓦	未調査	○	○	板葺石置	未調査	昭和４年以後	台帳	未調査 2.1m程	合板	８/10	×	×	×	×	×	×	×	○	×（当初○）
	Ｈ家	小六町	明治初～前期	部材	平	2	4,206	5,396	4間弱	5間半	表	上手	セメント瓦	3.2	○	×	板葺石置	3.2	昭和15年	聞取り	1,951	根太	６＋座敷飾/4.5	○	○	×	×	×	×	×	○	×
	Ｋ家	紙屋町	明治前期	推察	平	1	3,146	6,202	4間半	7間	—	上手	粘土瓦（黒）	4.5	○	○	板葺石置	3.2	昭和４年以前	台帳	2,861	棹縁	7	×	○	—	—	—	×	×	○	○
	Ｋ会	三町目	明治前期	部材	平	2	4,512	6,578	3間半	5間半	表	上手	セメント瓦	3.1	○	×	板葺石置	3.1	昭和４年以後	台帳	3,800	棹縁	８/６	○	×	×	×	○（後補）	×	×	○	○
	Ｓ瀬戸物店	二町目	明治前期（24年以前）	地所建物遺産相続ニ付登記済之証御下□願	平	2	4,595	7,090	4間	6間半	表	×	粘土瓦（黒）	4.3	○	○	板葺石置	2.8	昭和４年以前	台帳	4,032	棹縁	６/８	×	○	×	○（後補）	×	×	×	○	○
	Ｓ家	三町目	明治17年	棟札	平	2	4,634	7,389	3間	7間	裏	×	粘土瓦（黒）	4.2	○	○	板葺石置	3.1	昭和４年以前	台帳	3,912	棹縁	6	×	○	○	×	×	×	×	○	○
	Ｗｔ家	下戸町	大正元年	タンスの裏書	平	2	4,462	5,923	3間	5間	表	×	粘土瓦（黒）	2.9	○	×	板葺石置	2．9	昭和４年以後	台帳	4,050	棹縁	4.5	×	×	×	×	×	×	×	○	×
	Ｈｙ家	下戸町	大正期前後	推察	平	2	4,384	6,692	3間強	9間	表	裏手	セメント瓦	3.1	○	×	板葺石置	3.1	昭和４年以前	台帳	4,267	棹縁	7	○	×	○	×	×	×	×	×	○
	Ｎ家	五郎左衛門町	昭和15年	木造建物建築許可申請書	平	2	5,098	7,220	4間半強	6間半	表	×	セメント瓦	4.5	×	×	—	—	—	—	3,160	棹縁	4/12	×	×	×	×	×	×	×	○	×

表6—4　調査家屋一覧（3）

	家屋名	所在地	主屋									屋根								オエ											蔵
			建築年代	建築年代の根拠	妻入／平入	階数	軒高	棟高	間口	奥行	二階座敷の位置	オエに対してナンドの位置（復原）	現状の屋根葺材	現状の屋根勾配	屋根葺材の変更の有無	屋根の改造の有無	当初の屋根葺材	当初の屋根勾配	屋根葺材の変更年代	年代の根拠	天井高（復原）	天井意匠／当初	広さ／当初広さ〔帖〕	トオリニワ上部の明かりとり		見下ろす窓	渡り廊下の有無	回廊の有無	座敷飾			蔵の有無
																								天窓	妻壁の窓				仏壇	床の間	神棚	
相川周辺地区	Ｉｔ家	稲鯨	明治初頭	部材	平	2	4,556	6,448	2間半	4間	裏	○	粘土瓦	4.1	×	×	—	—	—	—	3,985*	—	10	—	—	×	×	×	×	×	×	×
	Ｄａ家	稲鯨	明治前期	推察	平	2	未調査	未調査	7間	2軒半	—	○	粘土瓦（黒）	未調査	不明	不明	—	—	—	—	2層吹抜4ｍほど	棹縁	6	—	—	×	×	×	×	×	○	×
	Ｉｙ家	稲鯨	明治前期	部材，聞取り	平	2	4,454	6,816	5間半	5間	—	○	粘土瓦	5.0	不明	不明	—	—	—	—	2,129	根太	8／10	—	—	×	×	×	×	×	×	×
	Ｉｃ家	稲鯨	明治中後期	推察	平	2	未調査	未調査	6間半	5間半	—	○	粘土瓦（赤）	未調査	不明	不明	—	—	—	—	1.5層3ｍほど	棹縁	8	—	—	×	×	×	×	×	○	○
	Ｉｍ家	稲鯨	大正5年		平	2	未調査	未調査	3間強	5間	裏	○	セメント瓦	未調査	不明	不明	—	—	—	—	1階分（2層吹抜）	合板／不明	8	—	—	×	×	×	×	×	○	×
	Ｄｈ家	稲鯨	大正11年	祈祷札，特徴	平	2	未調査	未調査	5間強	4間半	—	○	粘土瓦（黒）	未調査	不明	不明	—	—	—	—	2層吹抜	棹縁	8	×	○	○	×	×	×	×	○	×
	Ｍ家	下相川	明治末期	部材，建築様式	平	1	2,995	4,732	5間半強	5間	—	上手	セメント瓦	3.8	○	○	板葺石置	3.0	昭和39年	聞取り	2,370	合板／不明	8.5/10	×	×	—	—	—	×	×	○	○
	Ｎ家	鹿伏	明治前期	部材，形式（聞取り）	平	1	未調査	未調査	7間弱	5間弱	—	○	粘土瓦	未調査	○	○	板葺石置	不明	不明	—	未調査3ｍほど	棹縁	12.5	—	—	—	—	—	×	×	○	×
	Ｓ家	高瀬	大正3年大火後	聞取（大火後）	平	1	3,711	4,938	6間半	4間半	—	○	セメント瓦	3．3	不明	×	—	—	—	—	3,155	棹縁	10	—	—	—	—	—	×	×	○	×
	Ｔ家	二見元村	明治初～前期	部材	平	2	4,863	6,190	4間	5間	表	上手	セメント瓦	3.7	不明	×	—	—	—	—	4,000	棹縁	8	×	×	○	×	×	×	×	○	×
	Ｇ店	沢根炭屋町	昭和16年大火後	聞取（大火後）	平	2	未調査	未調査	約3間	8間	座敷か不明	上手	粘土瓦	未調査	×	×	—	—	—	—	未調査4ｍほど	棹縁	6	×	×	×	×	×	×	×	○	未調査
	Ｓ屋	沢根炭屋町	昭和16年大火後	聞取（大火後）	平	2	4,981	7,853	4間	8間	表	上手	粘土瓦	4.6	×	×	—	—	—	—	4,528	棹縁	6	×	×	○	○	○（後補）	×	×	○	○

	家屋名	所在地	主屋									屋根								オエ											蔵
			建築年代	建築年代の根拠	妻入／平入	階数	軒高	棟高	間口	奥行	二階座敷の位置	オエに対してナンドの位置（復原）	現状の屋根葺材	現状の屋根勾配	屋根葺材の変更の有無	屋根の改造の有無	当初の屋根葺材	当初の屋根勾配	屋根葺材の変更年代	年代の根拠	天井高（復原）	天井意匠／当初	広さ／当初広さ〔帖〕	トオリニワ上部の明かりとり		見下ろす窓	渡り廊下の有無	回廊の有無	座敷飾			蔵の有無
																								天窓	妻壁の窓				仏壇	床の間	神棚	
相川赤泊地区	Ｓ家	赤泊	幕末～明治初		妻	2	4,374	5,805	4間弱	5間半	裏	奥手	瓦	4.2	不明	不明	—	—	—	—	3,375	棹縁	10	×	○	×	○	×	○	○	○	×
	Ｎ屋	赤泊	明治7・8年以後	大火後再建（聞取）	妻	2	未調査	未調査	5間強	11間	表	上手	瓦	未調査	不明	不明	—	—	—	—	二層分4ｍほど	合板／無し	12.5	×	×	×	○	○	×	×	○	○
	Ａ屋	赤泊	明治11年	赤泊村史	妻	2	4,987	6,829	6間強	13間弱	表	奥手	金属板	3.1	不明	不明	板葺石置？	—	—	—	4,203	棹縁	17.5	×	○	×	○	○	×	×	○	○
	Ｙ家	赤泊	明治13年		平	2	4,154	6,435	6間強	5間半	無し	上手	瓦	4.7	○	○	板葺石置	2.9	不明	—	3,213	棹縁	10	×	○	×	×	×	×	×	○	×
	Ｍ家	赤泊	明治中期（120年ほど前）	聞取	妻	2	4,916	6,725	4間弱	6間強	表	奥手	瓦	5.4	不明	不明	—	—	—	—	4,196	棹縁	6	○	×	×	○	×	×	×	○	○
	Ｈ家	赤泊	明治31年		妻	2	4,754	6,550	5間強	6間半	表	奥手	瓦	3.8	不明	不明	—	—	—	—	4,017	棹縁	8	○	×	×	○	×	×	×	○	○
	Ｔｋ家	赤泊	明治40年	登記簿より（聞取り）	妻	2	4,902	6,739	6間	13間強（8間）	表	奥手	瓦	3.4	不明	不明	—	—	—	—	3,863	棹縁	15	×	○	×	×	×	×	×	○	○
	Ｔｍ家	赤泊	大正10年	聞取	妻	2	未調査	未調査	4間半	7間強	無し	上手	金属板	未調査	○	不明	板葺石置	不明	不明	—	1層半3ｍほど	棹縁	10	×	○	×	×	×	×	×	○	○
小木	Ｍ酒店	小木町	天保2年以後（1831年～）	天保2年の開発願	平	2	3,431	5,581	3間半	6間強	裏	奥手	○	3.0	○	×	板葺石置	3.00	不明	—	3,846*	無し	10	○	×	×	×	×	○	○	○	○

○：有　　×：無　　—：該当せず

佐渡鉱山は明治 29 年（1897）に三菱合資会社に払い下げられるが、大工町の衰退は大正９年（1920）の恐慌以降の鉱山不況[23]に伴うものと推察される。

町家主屋の規模について、大工町と下京町とを比較してみた。明治 20 年では両町ともにばらつきがあるものの間口２～６間、奥行３～７間あたりに多く分布している。しかし、昭和４年（1929）においては、下京町では明治期と大差ない状況が保持されているのに対して、大工町では、明治 20 年台帳には多く記載されていた間口３間以下、奥行４間以下といった小規模な主屋の記載が、昭和の台帳にはないことに気付かされる。

大工町における家数の減少は、実はその多くはこれら小規模な主屋であったと考えられる。

台帳からは、付属屋の有無や主屋との配置関係もわかる。主屋裏手には片側に下屋が配され、その裏手に納屋や土蔵が配置される状況が読み取れ、しかも土蔵は「サヤ」（覆屋）で覆われた形式が多い（後述）。

土蔵をもつ家を比較すると、大工町の場合、明治 20 年では 83 軒のうち 12 軒・14％、昭和４年においても 48 軒の内６軒・13％で、１割程度である。一方下京町では、明治 20 年には 27 軒中８軒・30％、昭和４年においても 21 軒中５軒・24％が土蔵を保有していた。土蔵の保有率は、商人町である下京町と鉱夫町である大工町との富裕度の指標とみなすことができよう。

ⅱ）屋根材料の変化

明治 20 年の台帳では、屋根に関して記載のある家屋（大工町 60 軒／下京町 20 軒）計 80 軒のうち、66 軒・83％（内訳、大工町 48 軒・80％、下京町 18 軒・90％）が板葺石置屋根と記録され、瓦葺の家屋は２軒のみ（大工町２軒、下京町０軒）という状況であった（図６―３７、３８）。

これに対し昭和４年の台帳では、屋根に関する記載のない家屋が多いなかで、板葺は大工町、中京町ともに２軒ずつしかなく、77 軒・55％（大工町 53 軒・56％、下京町 24 軒・24％）の家屋が瓦葺と記載されている（図６―３９、４０）。つまり、この間に多くの町家で板葺から瓦葺への葺替え、あるいは瓦葺での建替えが進んだことがわかる。板葺から瓦葺への屋根替えの状況は、数多くの町家遺構からも確認できる（後述）。

ⅲ）階数の状況

さらに、主屋の２階の有無に関する記載に着目して大工町と下京町とを比較すると、明治 20 年、大工町は主屋の 31％が２階をもち、総２階建の町家に限ると６％であった。一方、下京町ではその数 48％、総２階建も 11％と、いずれも２階をもつ主屋の比率は大工町よりもやや高いという状況が窺えた。

しかし、昭和４年に至っても、２階をもつ町家は大工町で 35％（総２階建６％）、下京町では 43％（総２階建 14％）と、２階建の比率は明治期の状況とそれぞれ大きくは変わらない。

以上のことから、相川上町においては、明治後期から昭和初期にかけて、主屋屋根の板葺から瓦葺への葺替え、

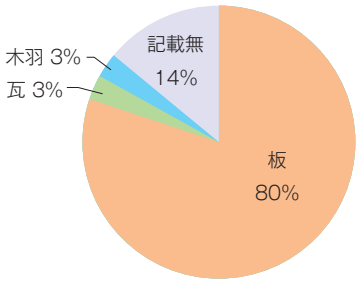


図６―３７　明治 20 年（1887）建物台帳・添付資料に記載された屋根材の比率（大工町）

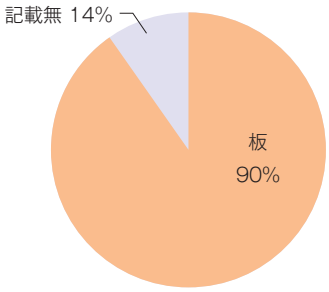


図６―３８　明治 20 年（1887）建物台帳・添付資料に記載された屋根材の比率（下京町）

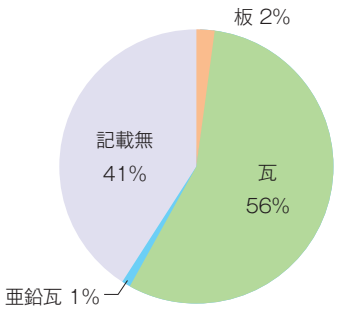


図６―３９　昭和４年（1929）建物台帳に記載された屋根材の比率（大工町）

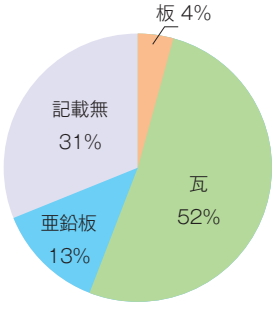


図６―４０　昭和４年（1929）建物台帳に記載された屋根材の比率（下京町）

あるいは建替えが進展したが、２階建の家屋は比率がやや高い下京町においても４割程度という状況で推移したようである。両町ともに平屋建の方が卓越するという状況が保持されたと考えられる。

このような平屋建が優勢な状況は、そのまま戦後に引き継がれ、現在の上町における町並み景観の特徴ともなっている。

(4) 台帳からみる相川下町の町並み

下町については、明治期の家屋台帳が不揃いであることから、昭和４年（1929）の家屋台帳のみを用いて下町全域の状況を概観することとし、その都度上町と比較した。

下町は範囲が広いことから、便宜的に北部（羽田町以北）と南部（一町目から四町目）にわけて検討した。この区分けは、羽田町以北が慶長９年（1604）頃から元和期にかけて整備されたのに対して、一町目から四町目はやや遅れて寛永６年（1629）に計画的に造成されたことが知られていて[24]、成立時期に差があることにも基づいている。

a　屋根材料の状況

昭和４年における下町地区北部では、表通り（主要地方道佐渡一周線）沿いにおける主屋の屋根葺材料は、主屋総数426軒の内、屋根材料の記載のある家屋を数えると、板葺が147軒・35％、瓦葺63軒・15％と板葺家屋が瓦葺の倍以上の数にのぼり、表通りの背後に位置する地区でも、主屋総数216軒の内板葺49軒・23％、瓦葺は14軒・６％と、いずれも板葺が卓越する状況であっ

図６―４１　昭和４年（1929）家屋台帳に記載された屋根材の比率（下町地区北部）

図６―４２　昭和４年（1929）家屋台帳に記載された屋根材の比率（下町地区南部）

図６―４３　昭和４年（1929）家屋台帳に記載された屋根材の比率（上町地区）

た（図６―４１）。

下町南部においても、表通り沿いにおける主屋の屋根葺材を数えると、主屋総数279軒のうち板葺161軒・58％、瓦葺70軒・25％と板葺が過半数をしめ、裏通りにおいても、主屋総数546軒のうち板葺が307軒・56％と多く、瓦葺は63軒・12％に留まっていた。（図６―４２）。

一方、上町地区については、昭和４年（1929）当時、同地区を東西に通る表通りに沿って建ち並ぶ主屋は、総数171軒の内、屋根材料の記載がある家屋の中で瓦葺は56軒・33％あり、板葺は31軒・18％。表通りの背後にある地区（以下裏通り）では、主屋総数130軒の内板葺が58軒･45％に対して、瓦葺は33軒･25％であった（図６―４３）。上町では瓦葺の比率が高く、特に表通りにおいて瓦葺への移行が進んでいた（図６―４６）。

下町地区における瓦葺家屋の比率は、相川上町の裏通りにおける瓦葺の比率よりも低い状況が明らかとなる。

ｂ　土蔵の所有状況

相川下町地区の北部において、表通りに沿う426軒のうち90軒・21％が土蔵を主屋の背後に従え、南部では281軒のうち95軒・34％が土蔵保有家屋である。裏通りではいずれも下がるものの、上町における土蔵の保有率が、表通り沿い171軒のうち18軒・11％であることと比較すると、下町における土蔵の保有率は総じて高い（図６―４４、４７）。

土蔵の所持を富裕度の指標とすると、下町のとりわけ表通りに面する町家は、相川市街地における富裕商人の集住地域である状況が窺える。

ｃ　主屋の階数と２階建町家の状況

前項では、相川上町の大工町及び中京町の両町における平屋建町家の卓越状況を指摘した。昭和初期における上町の全体状況も同様の結果であり、表通り沿いにおける２階保有家屋は、171軒の内64軒・37％と少なく、裏通りに面する地区では130軒の内30軒・23％とさらに低調であった（図６―４５）。

一方、下町地区においては、昭和４年当時、北部の表通り沿いで２階保有家屋が426軒の内260軒・61％と過半に達していたし、南部においても表通り沿いで281軒の内198軒・70％と高い率を占めていた。裏通り沿いでは比率は下がるものの、下町地区ではすでに２階建家屋が優勢で、町並みにおける主要な家屋形式として成立していたことがわかる（図６―４８）。

２階の状況についても、北部の表通り沿いで２階の位置が分かる154軒の内、片側２階が81軒・53％であるのに対し、両２階（すなわち総２階建）家屋が73軒・47％に達し、南部でも２階位置が分かる134軒のうち、片側２階54軒・40％に対し両２階が80軒・60％を占めるという状況であった。

家屋台帳からは、相川下町地区とりわけ南部における２階建町家の卓越状況と土蔵の保有率の高さが読み取れた。商業活動の進展に伴う町家家屋の発展と、上町地区との地域差が明瞭に窺えるのである。

（5）相川市街地の町家形式の概要

ｉ）家屋配置

相川市街地の伝統的家屋は、上町と下町両地区ともに土間を裏手まで通し、土間に沿って居室を並べる町家型の建築である（図６―４９）。主屋裏手には水廻りを張り出させ､中庭を介して裏手に納屋や離れが配置される。

納屋は「サヤ（鞘）」､「サヤ堂」と呼ばれて内部に土蔵を据えるものも多い（図６―５２）。家屋によってはサヤ堂に２棟の土蔵を据えたものもある（図６―４９参照、図６―５０）。

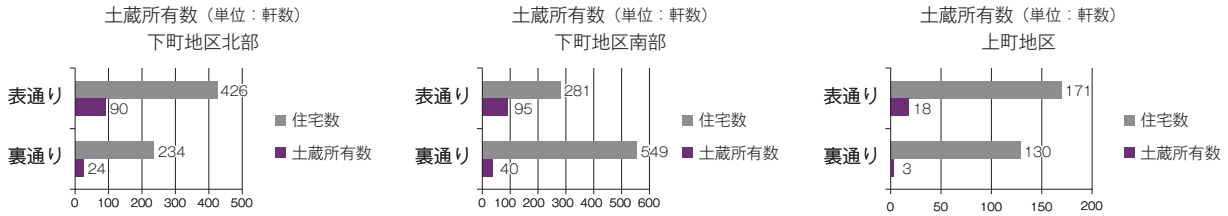


図６―４４　昭和４年（1929）家屋台帳に記載された土蔵の保有率

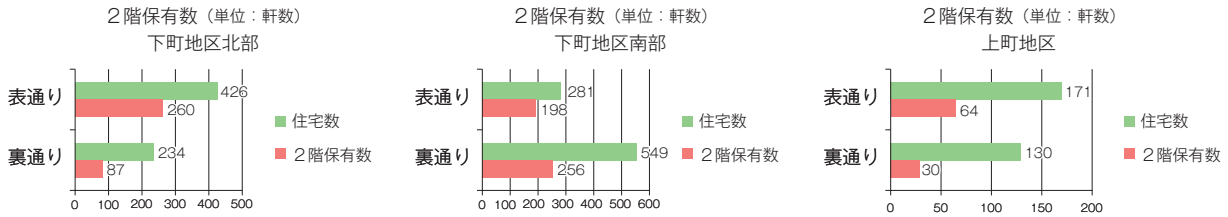


図６―４５　昭和４年（1929）家屋台帳に記載された２階の保有率

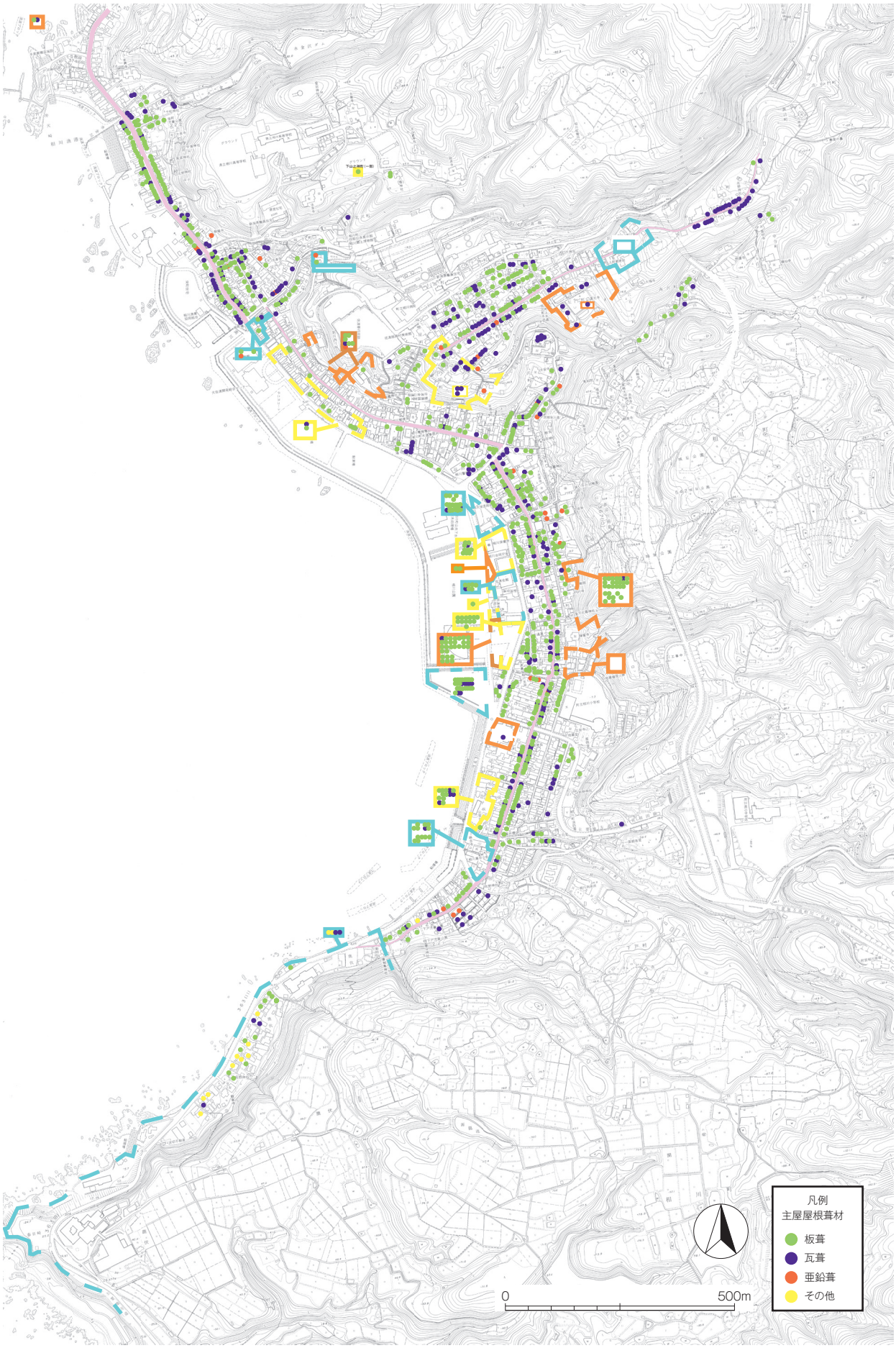


図６―４６　昭和４年（1929）家屋台帳に記載された主屋屋根材の分布図

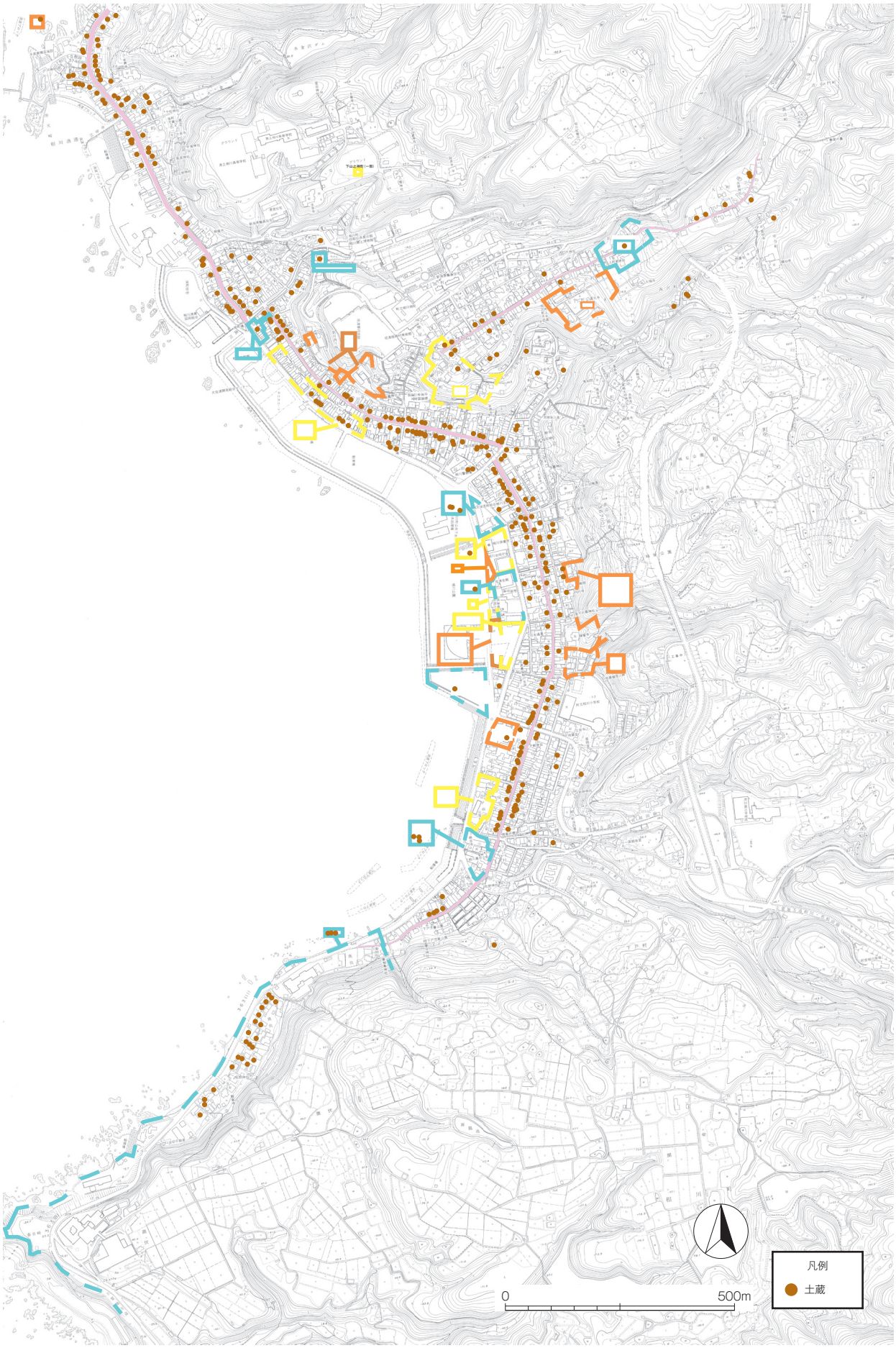


図６―４７　昭和４年（1929）家屋台帳に記載された土蔵所有の分布図

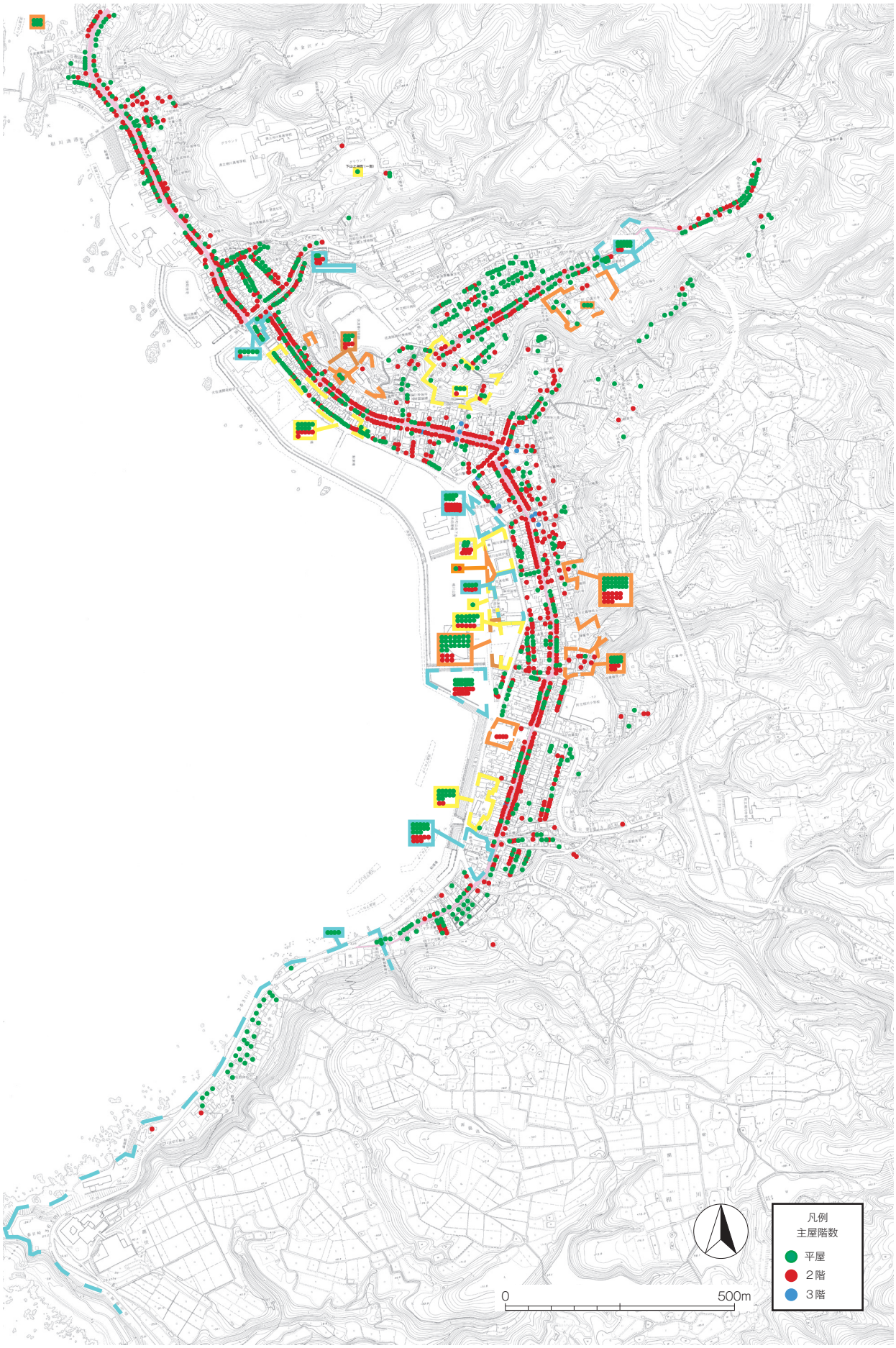


図６―４８　昭和４年（1929）家屋台帳に記載された主屋階数の分布図

ii）平面形式

主屋の１階平面は、通り土間に沿って表からミセ、オエ・（ナンド）、（ブツマ）、ザシキが並ぶ。オエとは町家のみならず、農家あるいは漁家、宿根木の家屋にも同様に設けられる部屋で、家の中心を占め、古くは囲炉裏を据えたためか上部は広い吹抜けとするのが一般的である。天井を張る場合も高く吊られ、オエ上部に２階はない。階段もオエに設置されることが多い。オエは動線の結節点であり、オエを中心に間取は構成されている。この点は、後述する農家や漁家においても同様である。

以上の説明は、相川の上町と下町いずれの町家にも共通する。しかし、相川の町家においてナンドの存在形態は一様ではない。ナンドをもつ場合は、間取の中心を占めるオエの上手（土間からみてオエの奥）にナンドが配置されることが通例であるが（図６―５１、図６―５３）、その位置にナンドをもたない家屋もある（図６―５４）。

ナンドの有無を廻る平面構成の違い、あるいはその地域差は、相川地区の町家の歴史性を考える上で重要な視点なので、この点は後節に譲る。

なお、居室列の裏手に位置するザシキは、通常縁を介して中庭に開かれる。しかし、相川下町のＳ商店（下戸町）の場合、ザシキの裏手、中庭との間に奥行１間の「ショイン」の間を挟み込む構成が当初形式として確認された（図６―５５）。両津地区の町家においてはショインの間が多数認められた（後節に事例）。ショインの間とは何か。なぜ佐渡島内の町家の間取に存在するのか。この点についても後節で検討したい。

iii）構造形式

相川市街地の町家の構造は、柱を基本的にみな通し柱とし、屋根垂木を支持する母屋まで立ち上らせるという形式で共通する。通し柱による構造形式を筆者は「通し柱型」と呼ぶが[25]、この形式は主屋に限らず納屋等の付属屋にも用いられていて、相川市街地においては普遍

図６―４９　Ｓ家住宅（三町目）　断面図・平面図・立面図（１：300）および外観

図６―５０　Ｓ家住宅の土蔵（三町目）

図６―５１　ナンドの内観（Ｋ家住宅、紙屋町、明治前期）

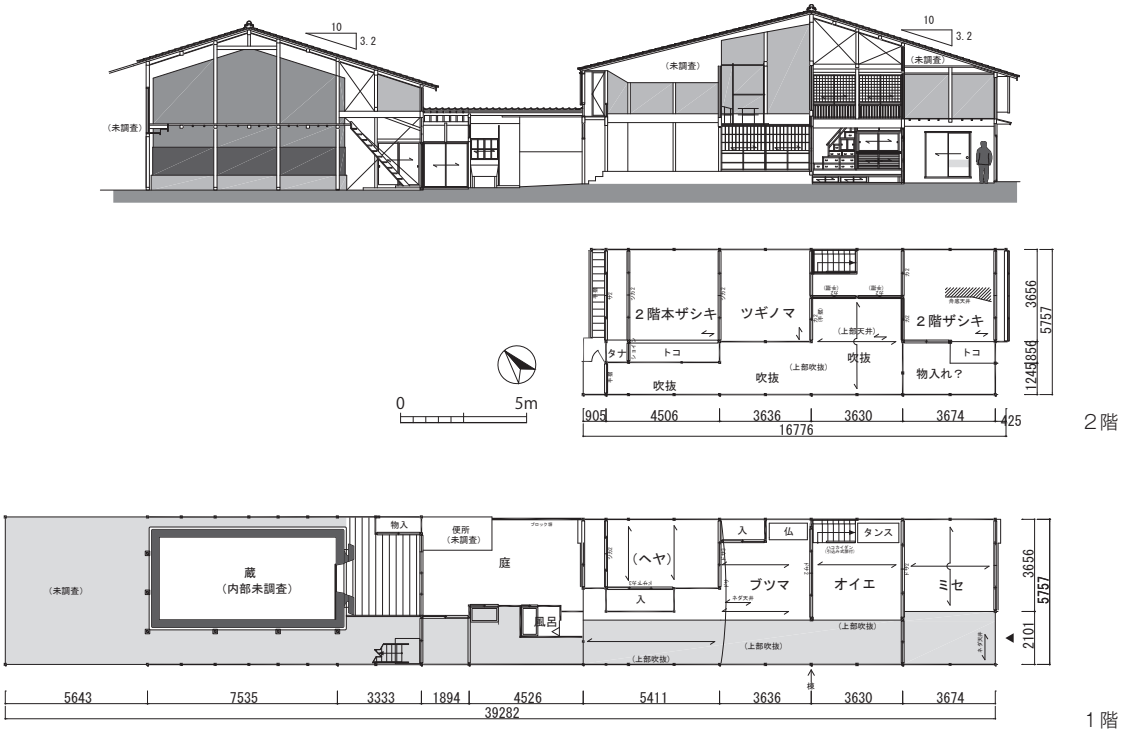


図６―５２　Ｈ家住宅（下戸町）　断面図・現状平面図（１：300）

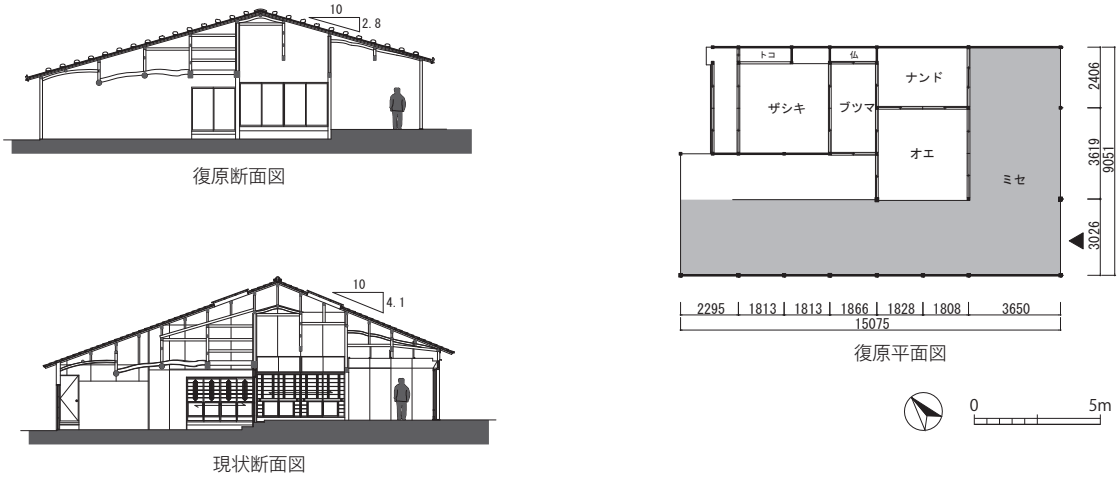


図６―５３　Ｉｔ家住宅（下戸町）　断面図・復原平面図（１：300）

現状断面図

復原断面図

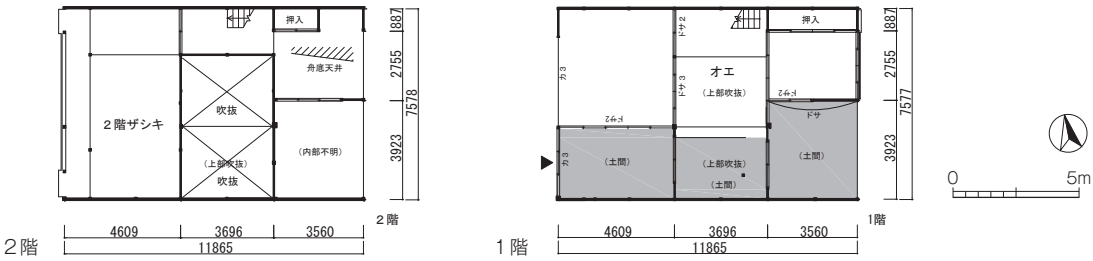
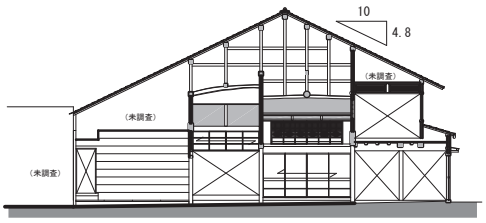
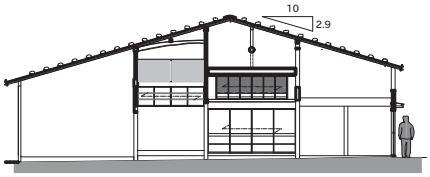


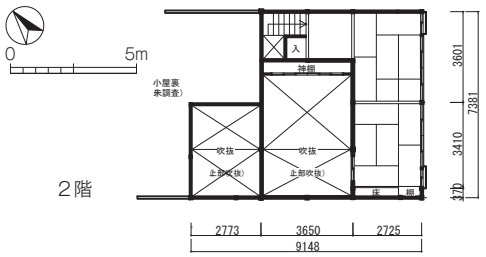
図６―５４　Ｓ瀬戸物店（二町目）　断面図・復原平面図（１：300）および外観

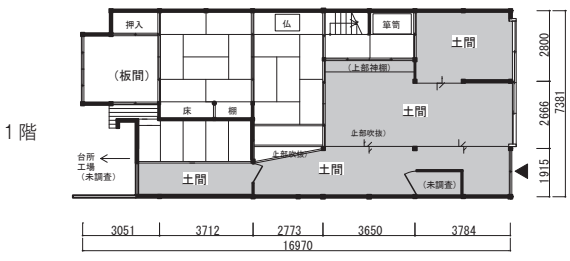


現状断面図

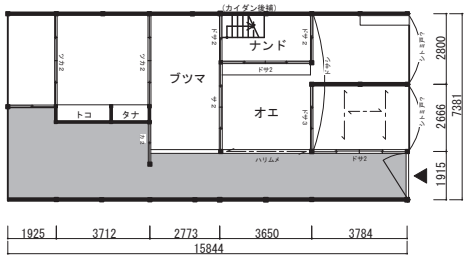


復原断面図





現状平面図



復原平面図

図６―５５　Ｓ商店（下戸町）　断面図・立面図（１：300）および外観

的な構造形式であるといえそうである。

しかも、両妻壁に立ち並ぶ柱の間隔は１間、あるいは１間半を２つ割りにするピッチが標準的である。これは母屋の間隔とも連動し、柱配置が疎らで軽やかな印象を受ける。屋根は、前述の通り古くは板葺の石置屋根が支配的であった。したがって、相川市街地における町家の基本構造は板葺きの石置き屋根をもつ通し柱型、ということになる。

古写真などから、板葺から瓦葺への普及過程が窺えるが、調査事例の中にも、実際に板葺屋根を瓦葺へ葺き替えたものが多く認められた。単に板葺の上に瓦を葺き直したものもあるが、屋根材を葺き替える際に、小屋組を改造し屋根勾配を変えたものも多い。

実際には、元の母屋上に添束をたて新たな母屋を渡し、瓦葺に適した勾配の垂木を並べる屋根改造が一般的である（図６―５３～５７）。なかには屋根替えに伴い２階を増設する大掛かりな改造事例も認められる（後述）。

iv）２階の居室形成

オエの上手、あるいはナンドの内部に階段（箱階段等）が設けられ、階段上部が２階の階段室となる。オエ上部は吹抜けなので２階はなく、階段室の表側あるいは裏手に２階ザシキが設けられる。２階ザシキは表側に設けられることが多いが、この２階ザシキの成立過程は、相川下町の町家から概要が追える。

相川下町の調査家屋を年代順に並べると、地区で最古級の町家であるＩｔ家住宅（18C 末～ 19C 初、下戸町、図６―５３参照）は平屋建である（当初は板葺石置き屋根）。天保９年（1839、棟札）に建てられたＳ商店（下戸町）も、当初は板葺石置屋根の平屋建に復原することができる（図６―５５参照）。

ついで、嘉永５年（1852）以来の祈祷札[26]を残すＴ家住宅（小六町）も平屋建である（図６―５６）。同様に、万延元年（1860、棟札）に建てられたＯ家住宅（大間町）は、軒切りにより表側の一部を失っているが、当初形式を復原すると２階の立ちは低く、２階に居室は認められない（表６―３参照）。

このように、相川下町における調査事例で、近世に遡るものに２階建の町家形式はみいだせず、平屋建が標準的な形式であったようだ。

年代は確認できなかったものの、部材の経年状況や家屋形式から、19 世紀中～後期と推定されるＨ家住宅（小六町）では、２階の表側にザシキが設けられている点が注目された。しかし、軒高に十分な高さがなく、２階ザシキはいわゆる舟底天井となっているし、裏手は屋根裏のままという状況である。当家住宅は、２階建町家へと移行する過渡的な形式を示す事例とみなせる（図６―５７）。

一方、明治 17 年（1884、棟札）のＳ家住宅（三町目）では、オエ上部の吹抜けを除いて２階空間が発達し、階高も十分に高い（図６―４９参照）。この頃には２階建町家が成立していたことを示す事例として当家は重要である。先に取り上げたＳ瀬戸物店（二町目、図６―５４参照）もＳ家住宅に前後する事例であることから、この時期２階建町家が一気に普及したことを窺わせる。

また、前述の天保９年（棟札）築のＳ商店（下戸町）は、時期不明ながら（少なくとも昭和４年＝ 1929 以前[27]）屋根を高めて板葺から瓦葺に葺き替え、表側に２階居室を設ける改造をおこなっている（図６―５５参照）。

このような２階の居室形成は、相川上町においてもおよそ同様の発展過程を想定することができる。

相川上町で年代が明らかな数少ない町家であるＴｏ家住宅[28]（元治元年＝ 1864、棟札、大工町、図６―５８）は、主屋裏手に小規模な２階ザシキを設けるが、表側の階高は依然低いままである（後述）。

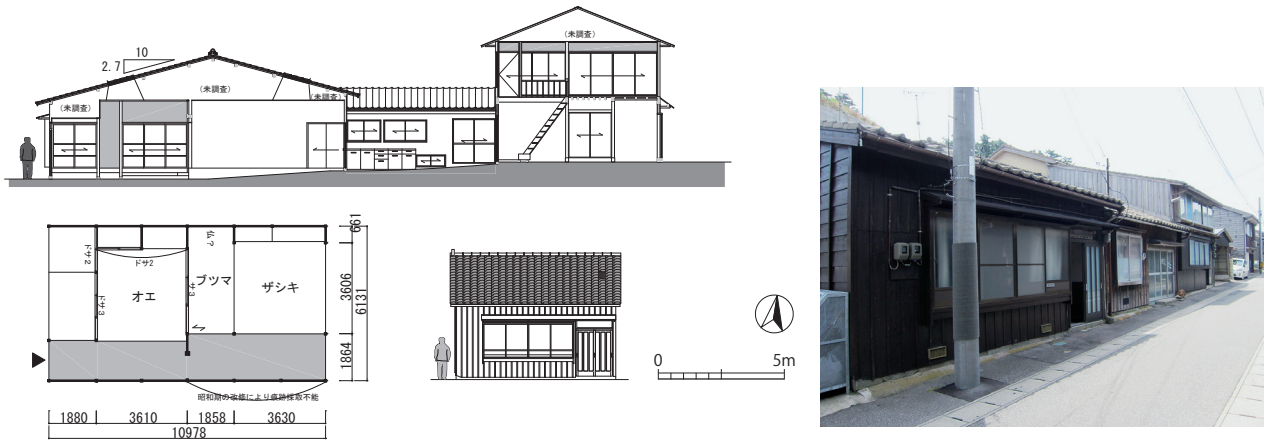


図６―５６　Ｔ家住宅（小六町）　断面図・復原平面図・立面図（１：300）および外観

一方、上町地区の明治後期に建てられたＴｇ家住宅（上京町、図６―５９）は階高が表裏ともに高く、２階ザシキを備えた町家の事例である。上町においてこの種の２階建町家は少ない。上町においては平屋建を主体とする家並みが今日まで踏襲され、上町における町家の２階建への指向は消極的である。

２階建町家の成立時期が遅く、しかも平屋建町家も建てられ続けた、という相川市街地、とりわけ相川上町における町家の建築動向は、結果的に、今日みる平屋建が多く残り、中２階建、２階建が混じる変化に富んだ家並を創出させた。

これに対して、両津湊地区では２階建町家の成立時期が早い。Ｏ家住宅は、同地区における２階建町家の標準事例であるが、文化６年（1809、普請帳）に建てられた町家で、今のところ島内で年代のわかる最古の町家である。Ｏ家住宅は、両津湊地区においてこの時期すでに十分な階高をもった２階建町家が成立していたことの証左として重要である（図６―６０、６１）。

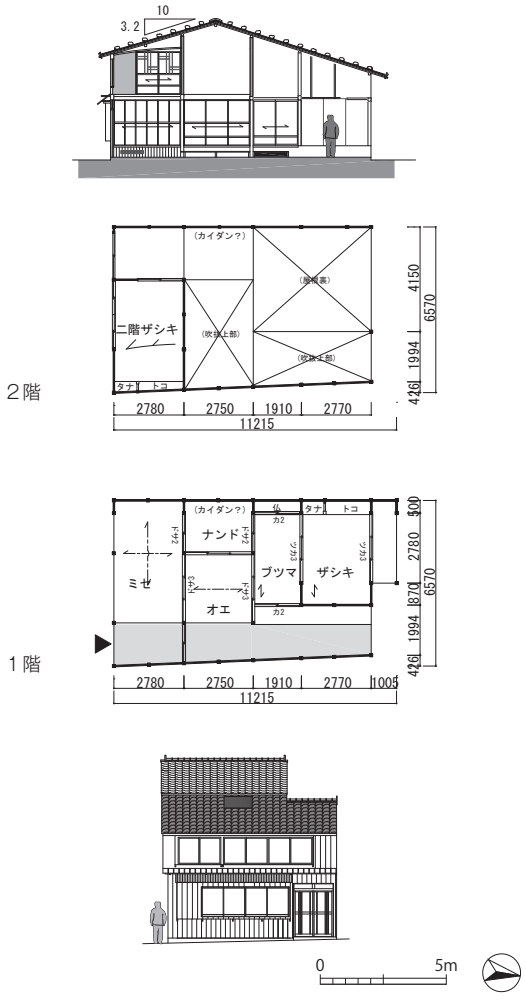


図６―５７　Ｈ家住宅（小六町）　断面図・復原平面図・立面図（１：300）

それゆえであろうか、同地区では２階建の町家が優勢で軒を連ね、統一感のある家並みを形成している。

(6) 相川市街地の町家におけるナンド

筆者はすでに相川上町の町家調査（2010 年度）の結果から、同地区の町家ではオエの上手（土間の反対側）にナンドがなく、他のどこにもナンドに相当する部屋がみ当たらないことを、両津湊地区の町家（図６―６０参照）と比較しつつ明らかにしている[(29)]。その状況は上町地区の町家の復原平面図を一覧すれば了解される（図６―６２）。しかしながら、その時点では事実関係の指摘に留まり、その意味や歴史的意義にまで関心が及ばず、十分な検討には至らなかった。

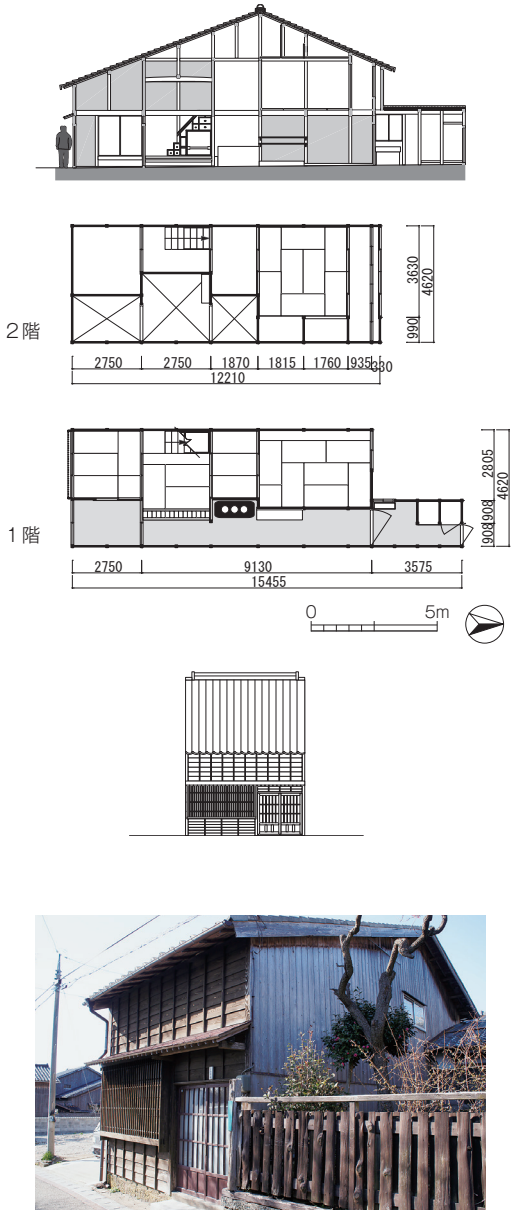


図６―５８　Ｔｏ家住宅（大工町）　断面図・復原平面図・立面図（１：300）および外観

ここでは、そのことの意味を改めて考えたい。

相川上町の調査家屋中で最も古いと考えられるＩ家住宅（推定19世紀前期、大工町）が、ナンドを持たない平面形式の典型かつ標準事例であろう（図６―６４、６５）。間口３間、奥行６間の平屋建のＩ家住宅は、幅１間の通り土間に沿い４室の居室を１列に並べている。

この単純な平面構成は、オエの上手に屋根裏へ昇るための階段を組み込んだ押入を設け、他の居室の上手は壁とする。居室裏手の部屋には棹縁天井が張られるのみで、床の間等の座敷飾りがなく座敷として未発達である点は古式である。その手前の部屋は天井が吹き抜けで、オエに続く部屋（仏間か）とみられる。このように当家住宅は、座敷が出来る前段階の事例として注目されるのである。

Ｉ家住宅に次ぐＳｕ家住宅（19世紀中期、当初平屋建て、中京町）における居室列最奥部の部屋は他室よりやや広く、当初より棹縁天井を張り、吊床を設えて、簡素ながら座敷としての造作を認めることができる。さらに19世紀中期あるいは後期に下ると目されるものの平屋建を保持するＳａ家住宅（大工町）やＫｕ家住宅（米屋町）、W家住宅（中京町）においては、居室列の最奥部の部屋に床の間と違棚を設えた座敷が成立している（以上、図６―６２、表６―１参照）。

このように相川上町の町家を年代順に通覧した結果、そもそもオエの上手に小室（ナンド）を設ける平面構成は１例も確認できないし、当地区で最古級のＩ家住宅から２階建の町家であるＴｇ家住宅（19世紀末期、図６―５９参照）に至るまで、ナンドに相当する部屋を居室内のどこにも認めることはできない。年代が下がるに従い、居室列最奥部の部屋が座敷として整えられ、その状況は、２階建の町家においても（Ｔｇ家住宅のように主座敷が２階へ移動するものの）、変わらない。

一方、相川下町においてはナンドを持つタイプと持たないタイプが併存する（図６―６３）。前述の通り下町地区で最古と目されるＩｔ家住宅（18世紀末～19世紀初期、図６―５３参照）は、平屋建で間口５間の中規模な町家であるが、オエの上手に６畳大のナンドが明確に区切られている。天保９年（1839、棟札）に建てられたＳ商店も、当初は平屋建に復原される町家であることは先に指摘した通りであるが、Ｉｔ家住宅と同様にオエの上手に４畳大のナンドが区切られている（図６―５５参照）。

これに対して、相川下町における嘉永５年（1852）の祈祷札を有するＴ家住宅（小六町、図６―５６参照）、あるいは万延元年（1860、棟札）のＯ家住宅（大間町）は、オエの上手にナンドは区画されず、当初から単純なる１列型の間取をもつ（表６―３参照）。

相川下町の町家は、明治期に入ると、Ｋ家住宅（明治前期、紙屋町）のように、平屋建ではあるものの座敷飾りが出そろうものと（図６―６６、図６―６７）、Ｓ家住宅（明治17年＝1884、棟札、三町目）のように２階が顕著に発達し、２階ザシキを備えるものと（図６―４９参照、図６―６８）、２パターンの発展方向が確認できる。この２例は、前者がナンドを有する近代町家の平面構成の典型例であり、後者は下町においてナンドを

図６―５９　Ｔｇ家住宅（上京町）　断面図・復原平面図・立面図（１：300）および土間上部（写真上）とオエの内観（写真下）

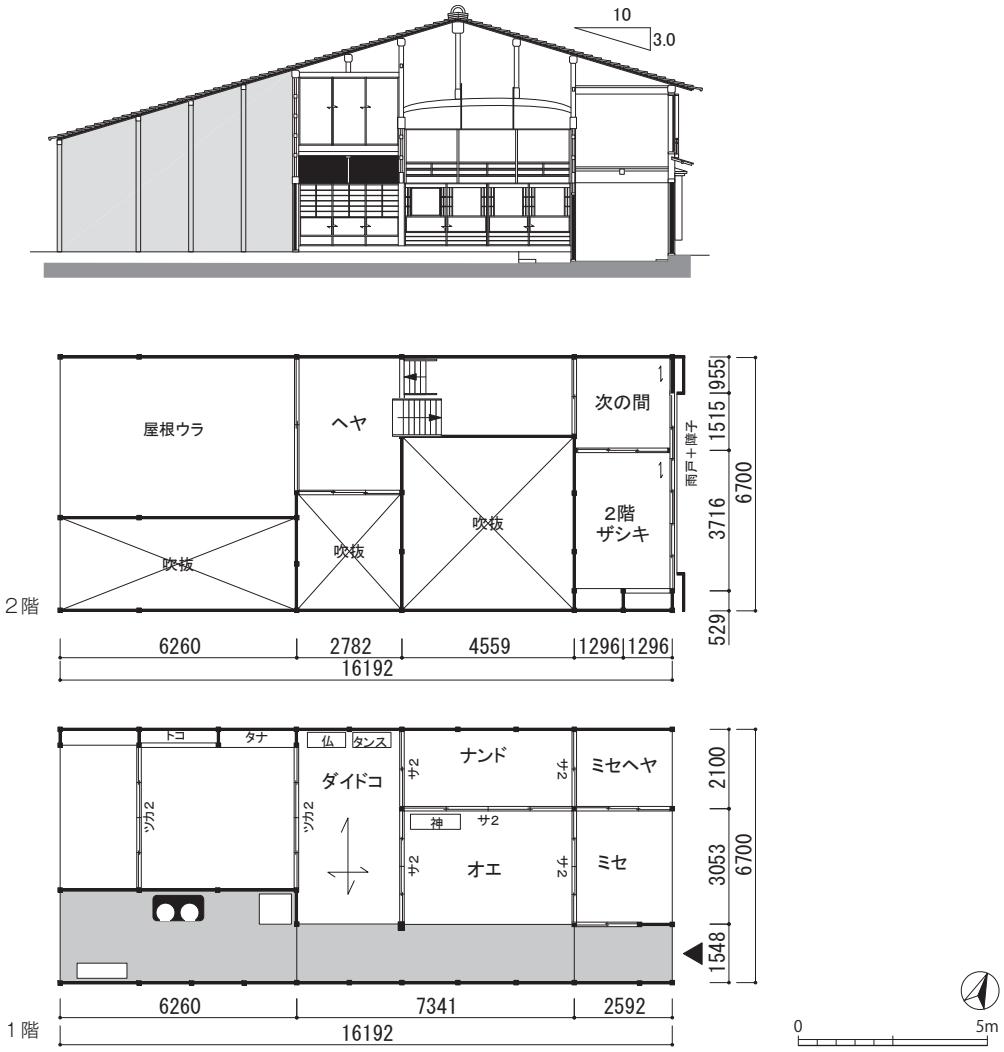


図６―６０　Ｏ家住宅（両津湊）　断面図・復原平面図（１：200）

図６―６１　両津湊の町並みとＯ家住宅（左手前）

欠いた平面形を引き継ぐ、近代における町家の代表事例といえる。

以上のように、相川下町ではナンドをもつ町家ともたない町家が近世から近代にわたって併存し、両者には年代的な前後関係も、また地理的な立地特性も認められない（図６―６３参照）。

ナンドをもたない平面形式は上町地区の町家と、構造形式を含めて同種である。一方、ナンドをもつ町家におけるナンドの存在形態は、オエの上手、すなわちオエの背後にそれが配置されるという点で、先行調査した両津湊地区における町家形式と類似する。

しかし、この点は単に両津湊の町家との類似に留まらない問題と捉えるべきで、両津湊をはじめとしてより広く他地区との比較検討をおこなう中で、相川市街地の町家形式を相対化し、その歴史的意味を探る必要がある。

（7）相川市街地周辺の家屋形式

相川下町の町続きに位置する鹿伏地区は、海岸沿いに立地し畑作と漁業を主とする集落である。鹿伏地区における伝統家屋の平面形式は、同地区のＮ家住宅（明治前期）の復原平面図にみる通り元板葺の純然たる農家型である（図６―６９、７０）。

さらに同地区からほど近い高瀬地区も海岸部に立地す

図６―６２　相川上町における町家平面形式の分布図

図６―６３　相川下町における町家平面形式の分布図

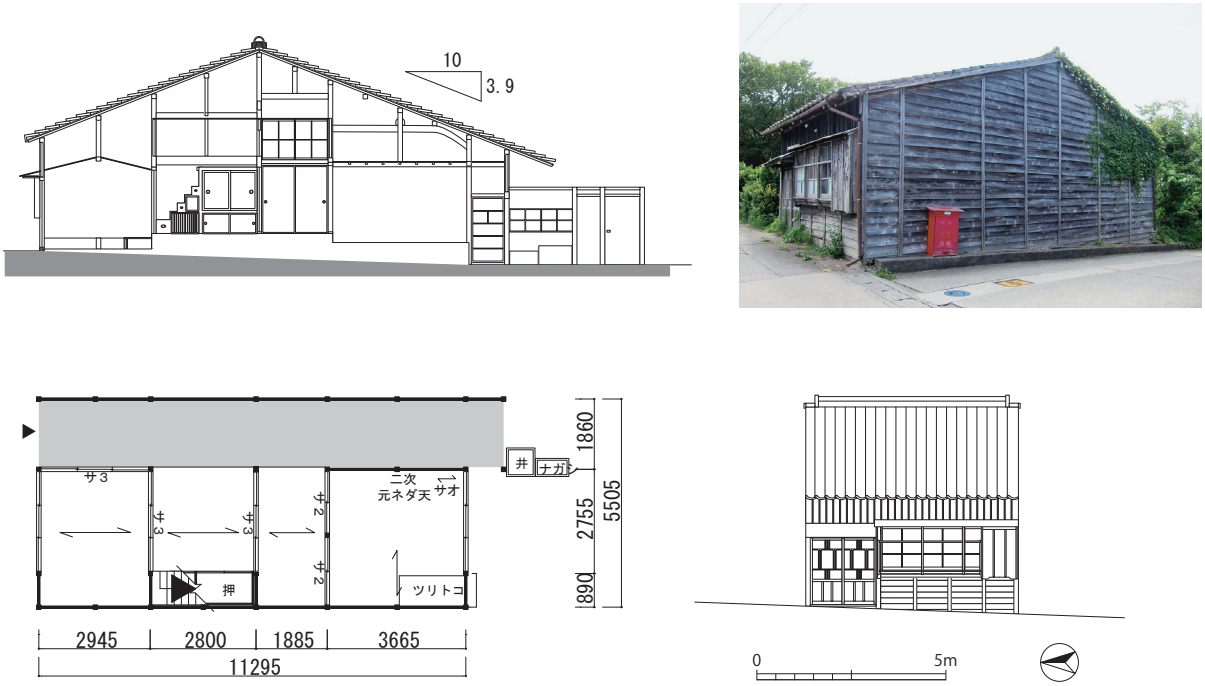


図６―６４　Ｉ家住宅（大工町）　断面図・復原平面図・立面図（１：200）および外観

図６―６５　Ｉ家住宅のオエ内観（大工町）

図６―６６　Ｋ家住宅のオエ内観（紙屋町）

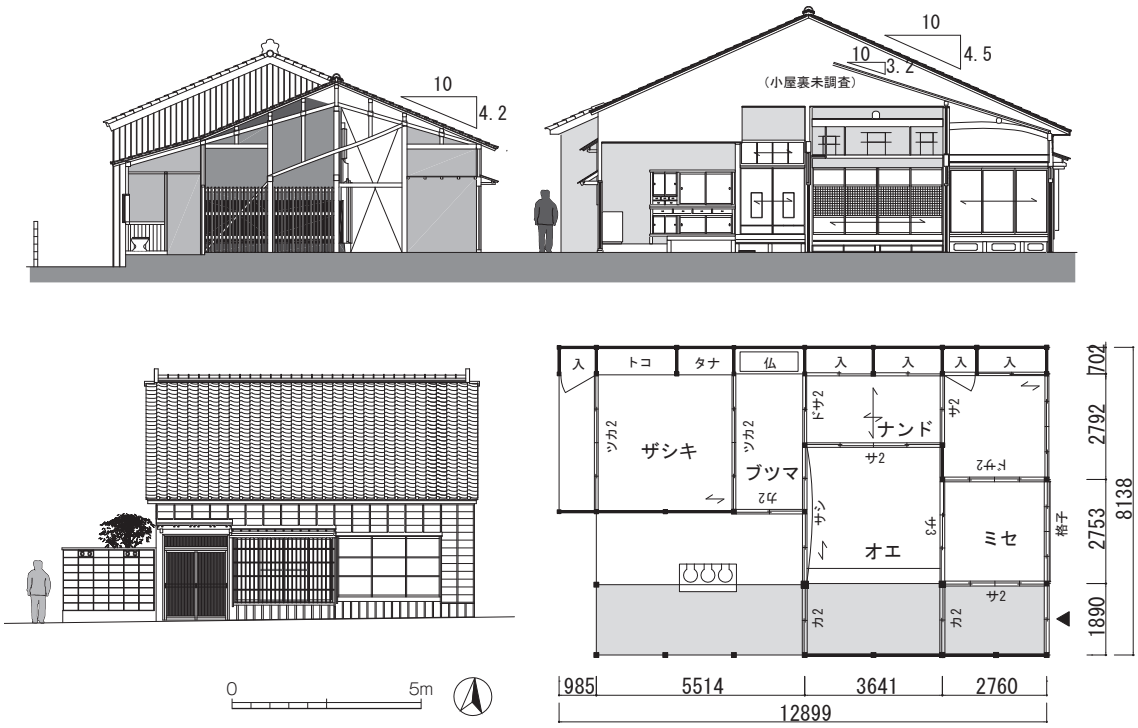


図６―６７　Ｋ家住宅（紙屋町）　断面図・復原平面図・立面図（１：200）

図６―６８　Ｓ家住宅のオエ内観（三町目）

る半農半漁の集落であるが、この地区の家屋も、Ｓ家住宅（大正期）が示す通り板葺の農家型住宅である（図６―７１、７２）。

佐渡島における農家住宅は、重要文化財に指定されている北條家住宅（18 世紀後半、佐渡市泉乙）に代表される（図６―７３、７４）。茅葺で広間型を基調とする平面は、広間にあたるオイエを中心に、裏手にナンドを設け、上手に座敷列を配する。上手の４畳間はショインとも呼ばれ、佐渡の民家に特徴的な部屋である（後述）。

相川近郊の鹿伏地区や高瀬地区の民家は、屋根は板葺に復されるものの、その平面構成が農家型だとみなすのは、北條家住宅とその平面が同類だからである。

高瀬地区からさらに南に下ると稲鯨地区がある。

稲鯨は純然たる漁村集落として知られ、同地区は小規模な家屋が密集し漁村らしい景観をよく留めている。地区のなかで比較的規模が大きいＩ家住宅は、明治中後期に建てられた家屋で、広く大きく吹き抜けたオマエを中心に、その裏手にナンド、オマエの下手に板敷きのダイドコ、上手に座敷列を設けて、その間取は農家住宅に類する平面を構成している（図６―７５）。

一方、稲鯨地区のＩｔ家住宅も部材の調子や経年の度合いから明治期に溯ると推察される家屋である。その規模は、間口２間半、奥行４間半と、稲鯨地区における調査家屋中もっとも小型で、おそらく佐渡島内の伝統民家の中でも最小規模の家屋であろう（図６―７６、７７）。

Ｉｔ家住宅は、小規模な間取ゆえに踏込土間式で竈が設けられ、土間に面するオエの一部とともにその上部が吹抜けとなる。オエの一角には階段を据え、オエ裏手にはダイドコとナンドが配置される。２階は、吹抜け以外をザシキとその前室（階段室）で構成する。

大正５年（1916）に建てられたというＩｍ家住宅も間口３間強、奥行４間半とＩｔ家住宅に次いで小規模であ

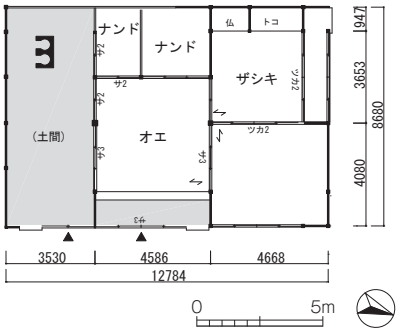


図６―６９　Ｎ家住宅（鹿伏）　復原平面図（１：300）

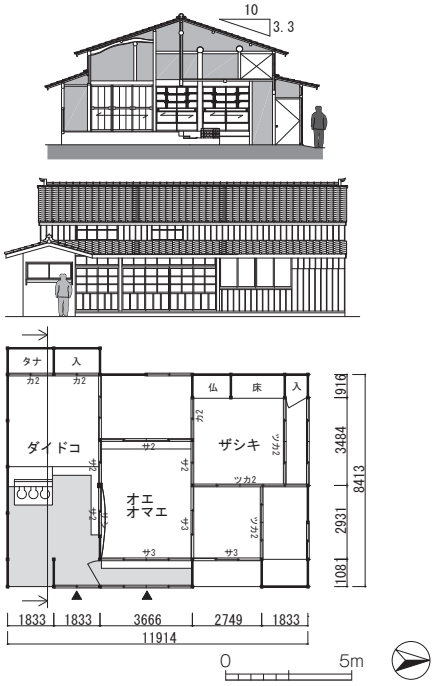


図６―７１　Ｓ家住宅（高瀬）　断面図・立面図・
復原平面図（１：300）

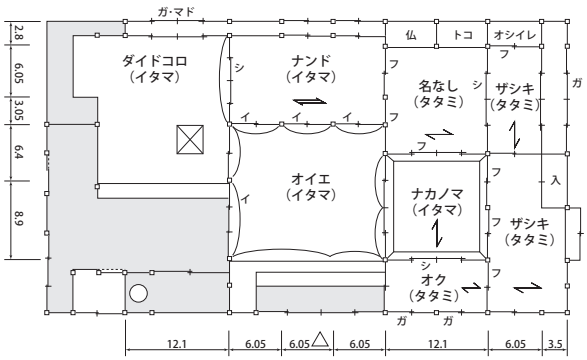


図６―７３　北條家住宅（重要文化財、佐渡市泉）　平面図

る。その復原平面の構成は前土間式であることをはじめ、１・２階ともにＩｔ家住宅とよく類似する（図６―７８）。

稲鯨地区でみいだされる小規模で、通常の町家型あるいは農家型平面と比較すれば変則的ともみえる平面形式は、集落の極端な高密度居住に起因するものであろう。

図６―７０　Ｎ家住宅のオエ内観（鹿伏）

図６―７２　Ｓ家住宅外観（高瀬）

図６―７４　北條家住宅外観（佐渡市泉）

集落の成立ちは異なるものの、島内の宿根木集落（重伝建地区）の伝統住居とは、その小規模性と圧縮型の平面構成という点で共通性を感じさせる。

とはいえ、稲鯨地区において、規模に余裕がある家屋は農家型であり、ゆえに小規模家屋の平面構成の特異性は、今回取り上げた調査事例をはじめとして農家型平面を基調とした変形型とみることができそうである。

稲鯨地区から真野湾沿いに入ると、かつて廻船業で栄え漁業を主体とする沿岸集落である二見元村地区、さらには鶴子銀山の鉱石積出港として発展し主要道沿いに町

場を形成している沢根地区がある。両地区では、通り土間をもつ町家型の家屋が採取された。

本論では、沢根地区のＳ屋を取り上げておく（図６―７９～８１）。沢根地区の炭屋町一帯は昭和15年（1940）の大火で被災した後に復興した。Ｓ屋も大火直後に再建された町家で、間口４間、奥行８間の当地区では標準的な瓦葺２階建町家で、ミセの裏手にオエとナンドを配し、さらにツギノマ、ザシキがつづく。２階は、表側のミセ上部に２階ザシキとツギノマを設けている。２階へ昇る階段はダイドコロの土間境に設置されていて、しかもオエの吹抜け上部には渡り廊下が廻されている。

このようなＳ屋のオエにおける階段と渡り廊下を伴う様相は、本論がこれまで取り上げてきた町家とは異なるオエ廻りの構成であるが、他地区においても類例が少なくない（後述）。

以上、相川市街地周辺集落の伝統住宅を事例的に採取し、平面形式を中心に復原的に検討を加えた。二見元村地区、沢根地区では町家型の平面がみいだされ、他地区ではいずれも農家型を基本とする平面形式が確認できた。

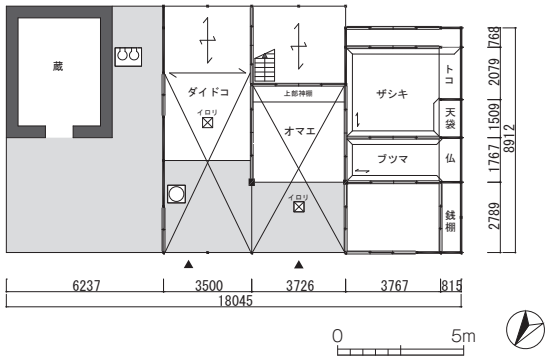


図６―７５　Ｉ家住宅（稲鯨）　復原平面図（１：300）

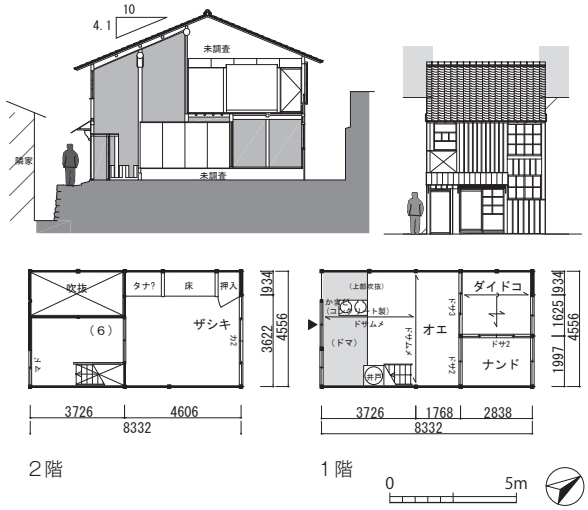


図６―７７　Ｉｔ家住宅（稲鯨）　断面図・立面図・
復原平面図（１：300）

(8) 両津湊地区の町家形式

両津は、両津湾と加茂湖を分ける礫洲上の夷と湊の２地区の漁村集落を母体とし、近世には佐渡の生産物の積み出し港や北前船など大型船舶の入港地としても発展した。夷地区は1945年に大火を被ったが、湊地区は被災を逃れたことで、短冊形の地割とともに近世近代の町家が今日も多く櫛比している[30]。

両津湊地区の町家は、相川下町における町家と同類の平面を構成することから、相川市街地の町家を相対化する上で好個の題材であると考えられる。

図６―７６　Ｉｔ家住宅外観（稲鯨）

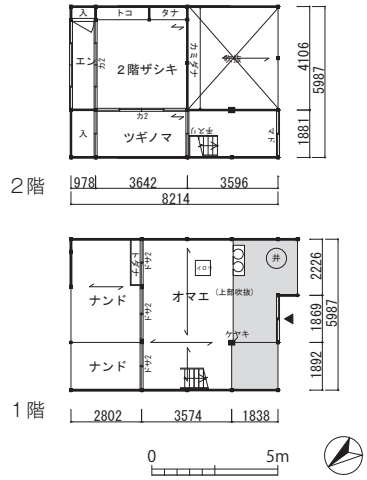


図６―７８　Ｉm家住宅（稲鯨）　復原平面図（１：300）

両津湊地区では、部材の経年状況やその形式から18世紀後期に溯りうる平屋建のＫｉ家住宅を最古とし、先述した文化６年（1809、普請帳）のＯ家住宅を経て、大正初期の大型町家であるＮ家住宅にいたるまで、９例の町家について復原的に詳しく検討した（表６―４参照）。これら９例は年代に係らずに一貫してナンドをもつプランタイプで共通する（図６―８２）。

ナンドの状況は間口幅によりその奥行が異なる。最古級のＫｉ家住宅では間口が３間に満たない為にナンドの奥行は１間もない。逆に間口６間に及ぶ最大規模の２階建町家であるＮ家住宅では、押入をもつ７畳半もの広いナンドが確保されている。

このように家屋規模にかかわらず、言い換えればＫｉ家住宅のように狭小な間口幅の町家でさえも、オエとナンドの関係、さらに他諸室との関係には定型とも呼ぶべき平面の一貫した型が存在する。

この平面の型は両津湊をはじめ相川下町、二見元村地区、沢根地区などに広く分布しているが、両津湊では年代の判明する最古のＯ家住宅をはじめ、それよりも古い遺構も残すことから、この平面構成を以後「両津型」と

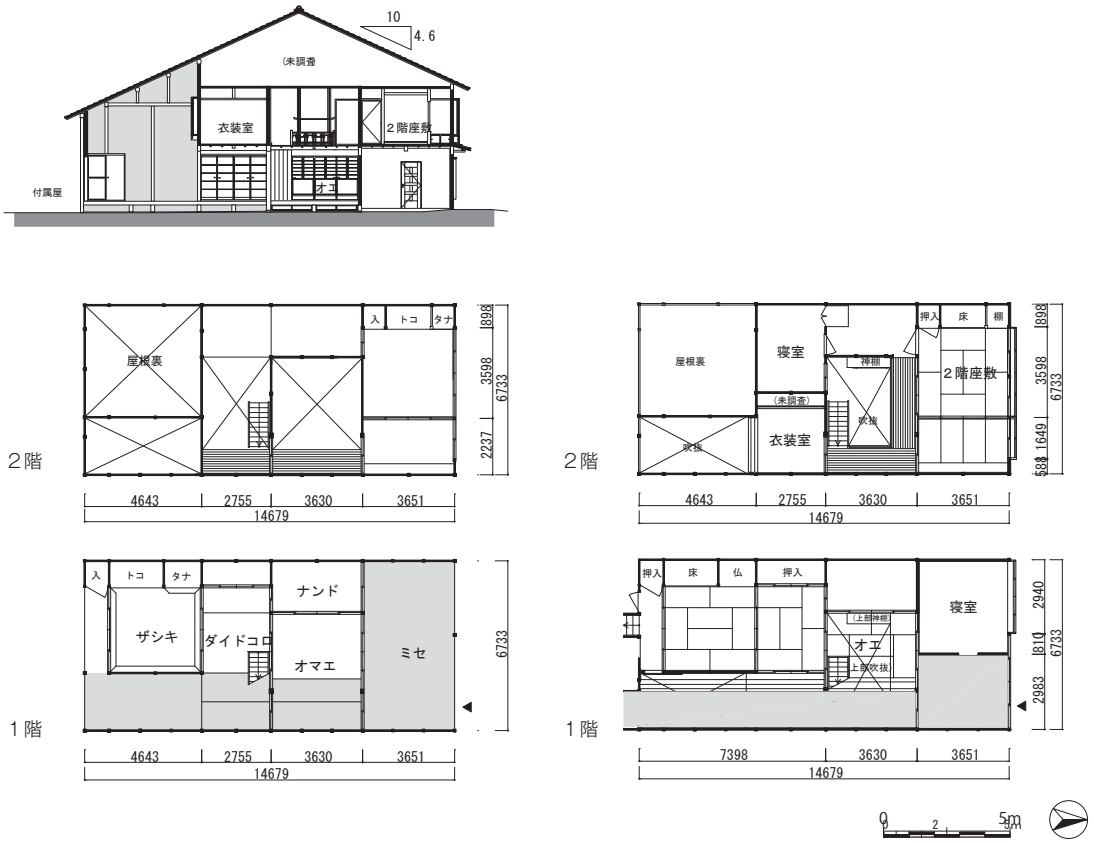


図６―７９　Ｓ屋（沢根）　断面図・復原平面図（左）・現状平面図（右）（１：300）

図６―８０　Ｓ屋外観（沢根）

図６―８１　Ｓ屋のオエ内観（沢根）

図６―８２　両津湊における町家平面形式の分布図

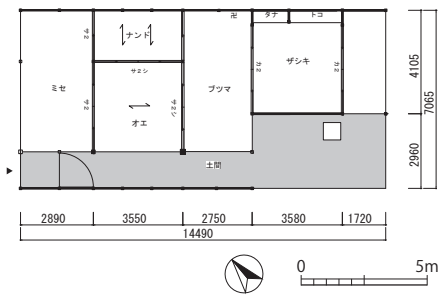


図６―８３　K店（両津湊）　復原平面図（１：300）

仮称する。

両津湊の町家９例の中には、ザシキ裏手に縁の代わりに先述した「ショイン」が付属しているものがある。地区で最古と思われるＫｉ家住宅にはないが、同家住宅に準じて古いＫ店を筆頭に６例の町家に４畳大のショインが確認できる。しかも、ショインは、明治最末期の事例（Ｎ家住宅）に至るまで年代に係らず付設している（表６―４、図６―８２参照）。

ショインの間を有する町家は両津湊に加え、相川下町においても２件（Ｓ商店、天保９年＝ 1838、下戸町、及びW家住宅、大正元年＝ 1912、下戸町）みいだせる。

両津湊のＫ店と先述した佐渡島における農家住宅を代表する北條家住宅（図６―７３参照）の平面を比較すると（図６―８３）、通り庭をもつ町家型の平面と農家型との違いはあるものの、オエとナンド、ザシキ、ショインによる相互の関係と平面構成は、オエとナンド境上部の神棚の構成を含め基本的に同質である。

ショインを伴うこともある両津型の町家平面は、短冊状の敷地条件に規定された通り土間型の平面構成をとりながらも、島内の農家型平面との類似から農家の平面形式を継承する可能性を感じさせる。実際、島外、例えば新潟県下の町家等をはじめこれらの中にこの種の平面構成はみいだせない。ナンドやオエにあたる部屋は新潟県下の町家にも存在するが、その構成は異なる（後述）。

(9) ナンドをもたない町家

相川上町の町家にはショインはないし、そもそもナンドがみいだせない。相川上町におけるナンドをもたない町家平面は同地区を中心にみいだせるので、仮に「相川上町型」と呼ぶとすれば、オエ上部が土間と一体に吹き抜けるという室内構成の違いを除けば、相川上町型は実は「京町家」に代表される通り土間型の町家とその平面構成において変わらない。

年代が下るに伴い居室裏手の部屋に床の間等の座敷飾りが備わり座敷が確立すると、なおのこと京町家における今日みる標準的な町家平面の型との類似性は高まる。

19 世紀末期（明治末期）と推察される上町地区のＴｇ家住宅（上京町）にみるような、居室を２列に配列する平面構成においても、その点は変わりがない。

既述の通り上町地区は鉱山町としての歴史的背景をもち、近世以来島外からの移住や島外との交流が活発で、関西地域との密接な関係も明らかにされている[31]。ただし、残念ながら建築や住宅に関わる文化的交流や繋がりを示す資料は現時点ではない。

しかし、ナンドをもたない相川上町型の平面構成は、佐渡島が日本海を挟んで対面する中越・下越地方（新潟県）における町家形式とも異なる（後述）。その平面や構造の類似性は、上越地方以南、すなわち北陸、近畿、さらには西日本における町家形式にむしろ求めることができ、筆者が「京都型町家」と位置づける町家形式がこれに対応する[32]。

京都型町家の遡源は京町家である。ゆえに、相川上町型の町家と京町家との類似性の指摘は京都型町家との類似性でもある。相川上町型町家と「京都」を冠する町家類型との関係性は、相川上町型町家が外来の町家形式であることを強く示唆する。

京都の町家はナンドをもたない。この点は、伊藤毅が「農家に一般的に備わっている『ナンド』という専用の就寝空間を欠いている」と、農家と比較しつつ町家建築の源流である京町家の特異性を指摘している[33]。京都型町家は、主としてその構造形式に着目した類型であるが、近畿地方から西日本に広く分布する京都型町家にはナンドをもたない平面形式が一般的である。

したがって、相川上町型の町家は、農家との関係が希薄な町家形式である、という指摘も成り立つ。

（10）２階ザシキの特異性

幕末に建てられた相川上町型町家であるＴｏ家住宅[34]（元治元年＝ 1864、棟札、大工町）は２階ザシキを有するが、２階ザシキは裏手に配置されているという点が注意される（図６―５８参照）。

Ｓ家住宅（明治 17 年＝ 1884、棟札、三町目）は相川下町の町家であるが、ナンドをもたない相川上町型の町家で、しかも２階が発達している（図６―４９、図６―６８参照）。総２階建の階高をもつが、２階ザシキは裏手に配置され、Ｔｏ家住宅と２階の構成において同質である。

これに対して、文化６年（1809、普請帳）のＯ家住宅（図６―６０参照）に代表される両津湊の２階建町家[35]を始め、相川下町における２階ザシキをもつ比較的早い事例であるＨ家住宅（19 世紀中～後期、小六町、図６―５７参照）、あるいは沢根地区のＳ屋（昭和 15 年＝ 1940 大火以後の再建、図６―７９～８１参照）などでは、表側に２階ザシキが設けられる。両津型町家における２階ザシキはまず表側に設けられるのである。

それゆえ、相川上町型町家における２階ザシキの配置は、相川上町型町家にナンドがないという事実と同様に特異である。相川上町型町家における２階ザシキの配置についても、あえていえば京町家のそれとよく似ている。表通りに面して立ちの低いツシ２階建の形式を踏襲する京都の伝統の中で、京町家の２階ザシキは裏手２階において展開する[36]。

むろん、京町家と相川上町型町家とのこの類似にどれほどの意味があるのかはわからないし、これをもって京町家との関係性を議論することもできない。しかし、相川上町型の町家が２階形成においても特異であるという指摘は、その外来性を示唆する理由として意味があろう。

（11）赤泊地区の町家形式

赤泊は佐渡島の南東の海岸線に位置し、越後の寺泊港とは佐渡と本州を最短距離で結び、宝暦元年（1751）以降、佐渡産物資の他国出しの許可も得て港町として発展し、漁業、廻船業さらには松前稼ぎでも栄えた[37]。

赤泊は、平入町家を主体とする島内にあって妻入家屋が目立つ町並みとして以前から注目されていた[38]。同地区では明治７年（1874）に大火があり、大半はそれ以降の再建家屋であるが、予備調査の過程で１例だけ大火を免れた家屋（Ｓ家住宅、妻入）をみいだしたので、同家住宅をはじめ古い遺構を中心に８件の町家（妻入７件、平入１件）を調べた。

赤泊の町家の平面は、チャノマを中心とする。相川地区を始めこれまで取り上げて来た町家におけるオエ・オウエを赤泊ではチャノマと呼ぶ。いずれもナンドをもつ点で共通するが、チャノマとナンドの位置関係には２系統あることが予想された。

まず、チャノマの上手にナンドを配する家屋である。このタイプは平入家屋であるＹ家住宅（明治 13 年＝ 1880、図６―８４）を始め４例みいだせた。これらはこれまで述べてきた両津型町家と同種の平面構成とみなしてよい。

他の４例はいずれもチャノマの裏手にナンドをもつ家屋で、典型事例は明治７年（1874）大火以前に遡るＳ家住宅である[39]（図６―８５）。この平面は、これまで本論で取り上げて来た他地区の町家ではみられない新手の形式である。

Ｓ家住宅では、他にもチャノマの上手壁面は当初床の間、仏壇、押入に３分割されていたことがわかり、またチャノマ下手の通り土間上部には渡り廊下が設けられ、

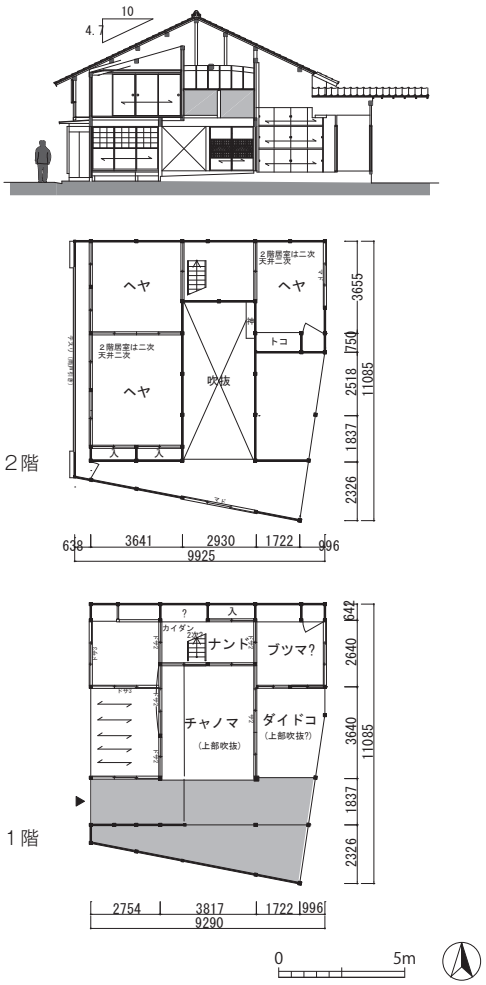


図６―８４　Ｙ家住宅（赤泊）　断面図・復原平面図
（１：300）

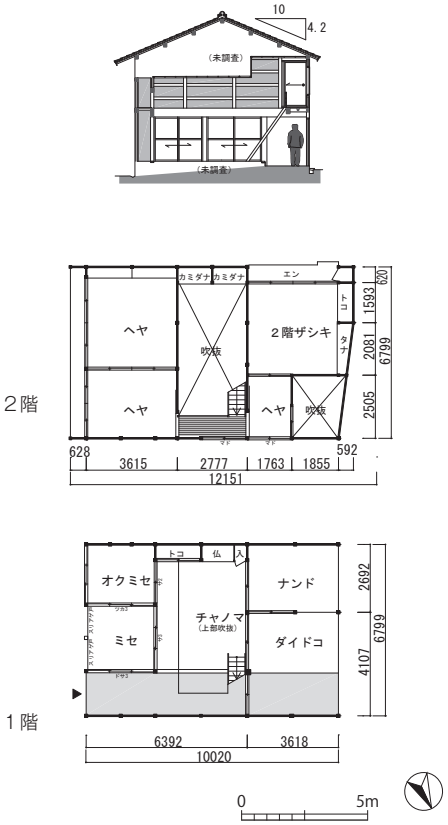


図６―８５　Ｓ家住宅（赤泊）　断面図・復原平面図
（１：300）

階段が当初から設置されている点も注目された。

Ｓ家住宅の間口幅は約３間半と同地区の調査家屋中最も狭い。しかし、チャノマの裏手にナンドを配置するＳ家住宅の平面構成が間口幅の制限によるものではないことは、規模の大きな妻入家屋においてもこのタイプが主流であることからわかる。

Ａ屋（明治 11 年＝ 1878、図６―８６）は大型ゆえに居室列を２列とし、「ナカス」と呼ばれる中庭を妻入主屋に欠き込むように設けているが、チャノマの裏手にナンドを設ける点でＳ家住宅と共通する。

相川や両津地区等ではみかけないこの種の平面構成を、以下「赤泊型」と仮称する。赤泊型平面は、赤泊の関連調査として実施した小木地区でも採取された。

小木は、赤泊とともに近世佐渡金銀山の外港として対岸の出雲崎とを結ぶ港町として栄えた。Ｍ酒店は、天保２年（1831）の新地開発に伴い建てられた町家で（当家所蔵文書から）、明治 37 年（1904）、町の主要部が焼失した大火の際にも被災を免れて、小木で恐らく最古の町家と考えられる。その室内構成は、ナンドをオイエの裏手に配置するもので、赤泊型とみなせる。

赤泊や小木がともに近世以来佐渡の重要な外港として、対岸の寺泊や出雲崎との密接な交流史があったことを踏まえれば、赤泊型町家については、寺泊や出雲崎地区の町家形式との関係を確認しておく必要があろう。

出雲崎地区は狭小間口の妻入家屋が櫛比する家並がよく知られ、調査報告もあるし[40]、寺泊の町家も妻入で数例の報告がある[41]。筆者らも出雲崎・寺泊両地区について実地に関連調査をおこない、平面を復原した（図６―８７）。

出雲崎と寺泊の町家平面は、ともにチャノマの裏手にナンドを配置する点で共通し、チャノマの上手はその多くが壁面を３つに分割して床の間、棚、仏壇などとし、その上部に神棚をしつらえる[42]。

出雲崎や寺泊の町家は妻入で、その平面構成は赤泊型町家と同類で、しかもチャノマ上手の３分割型の装置配置や土間上部に渡された廊下等の構成は、赤泊のＳ家住宅とよく共通する。

出雲崎や寺泊における町家形式は、さらに新潟市域における既往の町家調査の成果[43]と照らし合わせてもよく類似する。筆者らによる小須戸地区（新潟市秋葉区小須戸）における町家調査においても、採取した町家の平面構成は、チャノマの裏手にナンド（ネマ）を配する赤

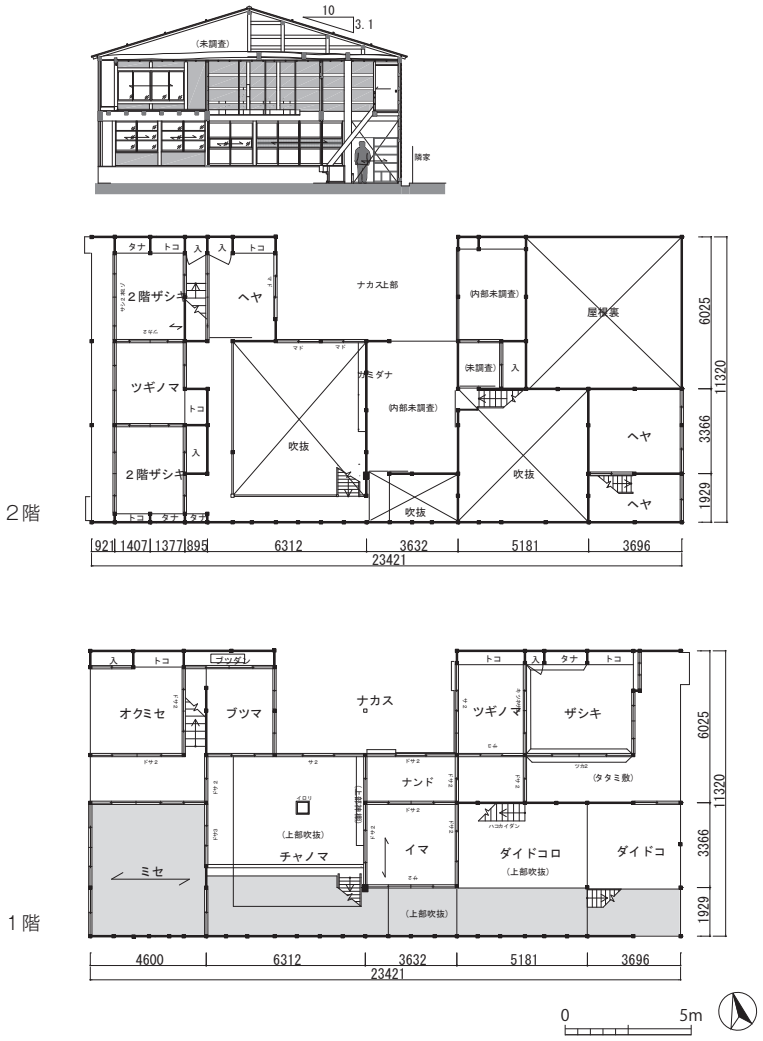


図６―８６　Ａ屋住宅（赤泊）　断面図・復原平面図（１：300）

泊型町家と同類で、チャノマ上手の３分割型の装置、あるいは通り土間上部の渡り廊下、など多くの共通点がある（図６―８８）。赤泊型町家は越後の町家、具体的には中越及び下越地方における町家形式との明確な共通点を指摘することができるのである。

赤泊の、明治７年（1884）の大火以前に溯る数少ない遺構であるＳ家住宅は妻入であった。大火後いち早く再建されたいわゆる「五人問屋」(44)と呼ばれる同地区における有力階層の大型町家（「Ｎ屋」「Ａ屋」など）も妻入である。赤泊の現状は平入家屋が数では優勢であるが、妻入家屋の方が古く、町は妻入町家を基軸に形成されたものと想像される。

妻入家屋は島内では珍しく、赤泊型の町家形式も赤泊や小木等に限られる。しかも中越・下越地方の妻入町家に似るとなると、赤泊型の町家は、新潟本土の町家形式が佐渡にもち込まれることで成立した可能性が高まる。

家屋の間取は生活様式や文化の投影だとすれば、赤泊型町家の日本海を挟む町家構成との類似性（「チャノマ」の呼称も含めて）は、中越・下越地方の生活様式や建築文化の佐渡への移入を示唆する。

(12) 結　び

相川上町型は外来型の町家だと先に述べ、赤泊型の町家も外来型であろうと指摘した。相川上町型は、近世初頭、相川上町の鉱山町の形成に伴い成立し、赤泊型は江戸時代の後半以降、対岸の中越・下越方面との航路の発展とともに到来したものと推察した。

しかし、相川上町型と赤泊型とはナンドの有無で間取の意味を大きく異にする。中越・下越方面の町家にもナンド・ネマがある。したがって、ナンドを欠く相川上町型は、近場からもち込まれたとは考えにくい。

島外からの家屋形式の伝搬や影響の実際を捉え、外来性を実証することは近距離であっても容易ではないが、相川上町型の存在は、京都型町家など京都起源の町家形式との関係を想定することで、初めて理解できる。

赤泊型がローカルな近距離型の外来形式であるのに対し、相川上町型は関西までも視野に入れたより広域にわ

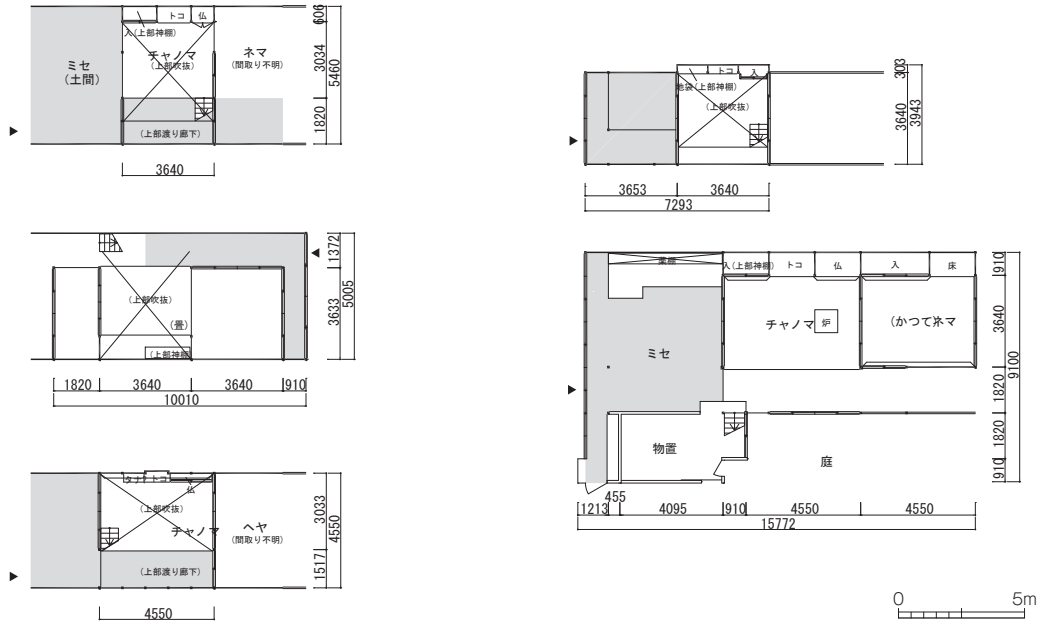


図６—８７　越後の町家平面図　復原平面図（寺泊＝左列、出雲崎＝右列）　（１：300）

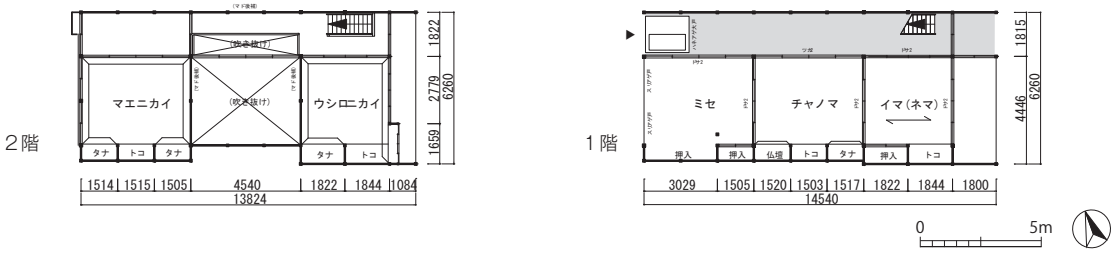


図６—８８　M家住宅（小須戸）　復原平面図（１：300）

たる建築文化の伝搬過程の所産だと考えたい。

相川上町型はその伝搬の飛距離において、まさに京都型町家だといえよう。筆者は、北は盛岡から南は福岡さらには長崎辺りにまで広域にわたり京都型町家の存在を指摘した。日本の町家の中から京都型町家を析出することで、農家とは異なり、町家はローカリティーのみでは理解できないことを示した。近世町家のユニバーサリティーは京都型町家に由来するのである。

相川上町型と赤泊型町家の発見は、日本列島における町家形成とその伝搬の歴史の中に佐渡町家も意義づけられることを示した[45]。相川上町型は、近世初頭、島外からの流入者により人為的に形成された鉱山町という特殊な都市空間の中で成立した。ゆえに、相川上町型は京都型町家の好個の事例と意義づけられてよい。

佐渡の町家は、京都型町家（相川上町型）、近在からの外来型町家（赤泊型）、農家由来の在来型町家（両津型）の３類型で構成される。日本各地の町家形成もこれらのいずれかに類型されるはずである。その意味で、佐渡の町家は日本の町家形成の縮図、だといっても大過ない。　（大場　修）

２．寺社建造物の特徴

(1) 寺　　院

ⅰ) はじめに

ここでは『佐渡市寺院建造物悉皆調査報告書』[46]より相川市街地及びその周辺地区の寺院･堂の部分を要約、抜粋し、新たに構成して紹介する。

まず、寺院と寺院から独立した堂を含む37件（41棟）を調査対象とし、１次調査台帳を作成した。この台帳には件名、所在地、宗派、各建物の名称、構造規模、屋根形式、建築年代とその根拠、保存度、２次調査の有無とその理由を記載した。この他に略配置図の作成と写真撮影をおこなった。

建築年代の設定については、文献や史料等の文字情報から得た建築年代と建物に整合性が合えば、その年代を建築年代とした。しかし､大多数の建物は情報が少なく、そのため、部材の風化や色合い、絵様彫刻の意匠等から建築年代を設定した。なお、建築年代は１世紀を３等分とした前期、中期、後期を基本とし、更に情報が少ない場合は１世紀を前半・後半と区分した。

１次調査台帳より得た情報をもとに、建物を種別に分類し、建築年代の古い順に並べた。さらにその中から詳細調査対象を抽出し、保存度、建築年代を主眼とした５段階の評価項目を設定し、更に調査の優先順位を３段階に分け、検討を加えた。

なお、本堂は宗派別に分類し、その他は建物の種類別に一覧表を作成した｡この結果､相川市街地では11件（13棟）の詳細調査をおこなった。

これらの評価項目や調査の優先順位、建物の種類別の詳細については前述の『佐渡市寺院建造物悉皆調査報告書』に詳しく記載している。なお、相川市街地の調査対象物件については、宗派別本堂が曹洞宗２件、浄土真宗10件､浄土宗４件､日蓮宗９件､真言宗６件､天台宗１件、臨済宗１件、寺院とは別に独立した堂４件の計37件である。

ⅱ) 個別解説

前述の報告書より詳細調査をおこなった本堂と堂を中心に紹介する。

ａ　曹洞宗

相川市街地には曹洞宗寺院は２件存在する。これらは詳細調査の対象とはなっていないが、前述の『佐渡市寺院建造物悉皆調査報告書』には、13件の曹洞宗本堂が紹介されている。このことを鑑み、ここでは観音寺本堂（下寺町）の１次調査の情報を抜粋する。

観音寺本堂（図６―８９）

構造・規模：桁行７間半、梁間７間半、入母屋造平入、向拝１間付、桟瓦葺

建築年代とその根拠：1800年代中期、絵様の意匠

保存度：屋根は新しいがその他は良好。

２次調査対象の有無とその理由：指定文化財候補、内外陣境に柱がなく進歩した間取。

ｂ　浄土真宗

長明寺本堂（南沢町）（図６―９０～９２）

桁行７間、梁間５間半、切妻造平入、向拝１間付、桟瓦葺の建物で、北を正面とする。平面は六間取形式で、北側に幅９尺の前廊下を設ける。

聞き取りによると、元は石置木羽葺屋根であったが、昭和35年（1960）に棟高を上げ、現状の桟瓦葺へ変更したという。また、向拝は意匠及び本堂に残る痕跡から後設と判断できる。

柱、梁の主要な骨格は当初のまま残され、方柱の面幅は大きい。「内陣」には「道場形式」と呼ばれる三連横並びの祭壇を有し、「御堂座敷」を堂内に組み込む平面形式や床の間まわりには面皮材を使用していない座敷の意匠は建築年代の古さを表している。加えて、斗組は上部荷重を支える構造材として位置付けられている。

建築年代は、明治16年（1883）の「新潟県神社寺院仏堂明細帳」によると、当寺は元禄15年（1702）の再建とされるが、意匠からしても元禄期以前とみて差し支えない。新潟県内では最古の類に入る浄土真宗本堂である。

大福寺本堂（六右衛門町）（図６―９３、９４）

桁行５間、梁間５間半、向拝１間付、切妻造平入、桟瓦葺の建物で、西を正面とする。平面は背面側を内陣列

図６―８９　観音寺本堂

とし、中央を「内陣」、両脇を「余間」とする。正面側３室全体を「外陣」とし、「外陣」東側１間を「矢来の間」として用いる。西側には１間幅の前廊下を設ける。

「内陣」には「道場形式」とも呼ばれる三連横並びの祭壇形式が残る。余間の幅は１間と狭く、古式な形式をとり、外陣の架構は本格的でよく整っている。「外陣」の独立柱は円形で、格式の高さが窺える。ただし、斗組は正面側のみに意匠をみせる片蓋形式の化粧材で、背面側は柱が直接上部荷重を支えている。比較的小規模な本堂でありながらも細部まで様式的に整っている本堂である。

建築年代は虹梁や拳鼻に施された渦巻彫刻から 1700 年代後期の建築と推測される。

ｃ　浄土宗

法然寺本堂（下寺町）（図６―９５、９６）

桁行５間、梁間７間、入母屋造平入、向拝１間付、桟瓦葺の建物で、北を正面とする。平面は内陣列、「外陣」、「前廊下」で構成されるが、内陣列の各部屋は奥行が長い。聞き取りによると、明治期に屋根を木羽葺から瓦葺に変更したという。

図６―９０　長明寺本堂

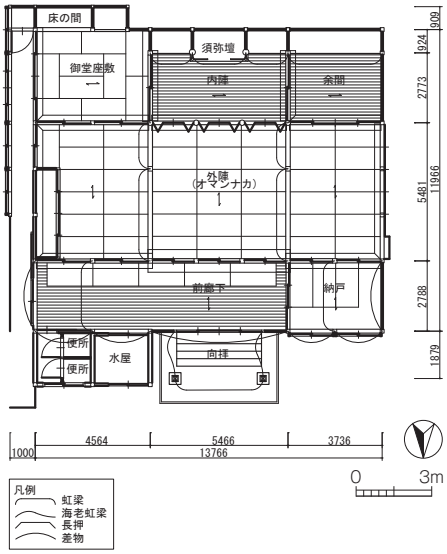


図６―９２　長明寺本堂　平面図（１：200）

当本堂の内外陣境虹梁の渦巻彫刻（内陣側）や来迎柱の木鼻の意匠は 1700 年代前期、または 1600 年代に遡る可能性がある。ただし、これらの部材には金箔押しが施され木地が確認できないため、詳細は不明であり、他からの転用材とも考えられるが、大部分の部材は絵様彫刻の意匠や部材の色合いから、1700 年代後期のものと考えられる。

大安寺本堂（江戸沢町）（図６―９７、９８）

桁行７間、梁間６間半、入母屋造平入、向拝１間付、桟瓦葺の建物で西を正面とする。平面は六間取形式で、内陣東面には奥行１間半の開山堂を配する。西側には９尺の前廊下を設ける。

当寺には大正元年（1912）９月の年号を記す２枚合わせの棟札が残されている。棟札の記述より屋根の下地改修と葺替えがおこなわれたと考えられる。堂内の各部屋は虹梁で区切られ、虹梁の両端には豪華な絵様が施されている。加えて内外陣境や須弥壇まわりは壮厳を極めている。

当建物には「八月八日皆出来上棟」と記す文化９年（1812）の棟札が保管されている。堂内は明るく開放的な空間であり、文化９年（1812）の棟札は建物自体と照合しても妥当性がある。

図６―９１　長明寺須弥壇

ｄ　日蓮宗

瑞仙寺本堂（中寺町）（図６―９９、１００）

桁行７間、梁間８間、唐破風向拝１間付、桟瓦葺の建物で、西を正面とする。平面は中央に日蓮宗特有の奥行のある「内陣」を設け、正面側の両脇を「外陣」とする。西側には２間幅の「前廊下」を設ける。「前廊下」は南北に１間ずつ張り出し、本堂全体の平面は凸型となる。

向拝は後設である。来迎柱周辺には多数の痕跡が残され、以前の姿は不明である。

当本堂は寛永元年（1624）開基・建立の記録が残る。前廊下の繋ぎ虹梁は簡素な意匠でまとめられており、その手法は古風で 1600 年代中期以前の建築と推測される。

法輪寺本堂（下寺町）（図６―１０１、１０２）

桁行８間、梁間６間半、切妻造平入、向拝１間付、桟瓦葺の建物で、北を正面とする。平面は中央に奥行のある「内陣」を配し、北側には１間幅の「前廊下」を設ける。屋根及び背面には大きな改造がみうけられる。向拝には建築時に他の建物から転用されたものと考えられる部材があり、意匠的に本体建物と時代差がみうけられる。

現在の本堂をみる限り、意匠から 1800 年代前期の建物と推測されるが、向拝の意匠は 1700 年代中期（後半）、来迎柱の構えは 1600 年代に遡るため、他の建物からの部材転用、前身建物からの部材再用の可能性も考えられる。

ｅ　真言宗

大乗寺本堂（観音堂）（下山之神町）

（図６―１０３、１０４）

正面５間、梁間５間、宝形造、切妻向拝１間付、桟瓦葺の建物で、南を正面とする。平面は背面側を「内陣」、

図６―９３　大福寺本堂

図６―９５　法然寺本堂

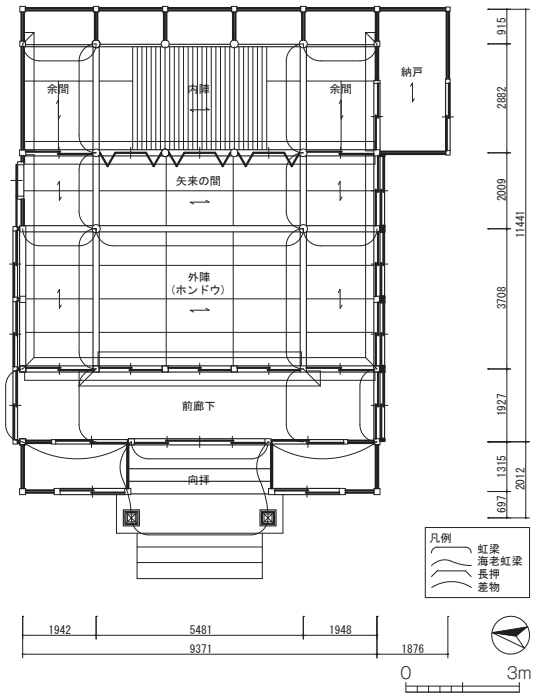


図６―９４　大福寺本堂　平面図（１：200）

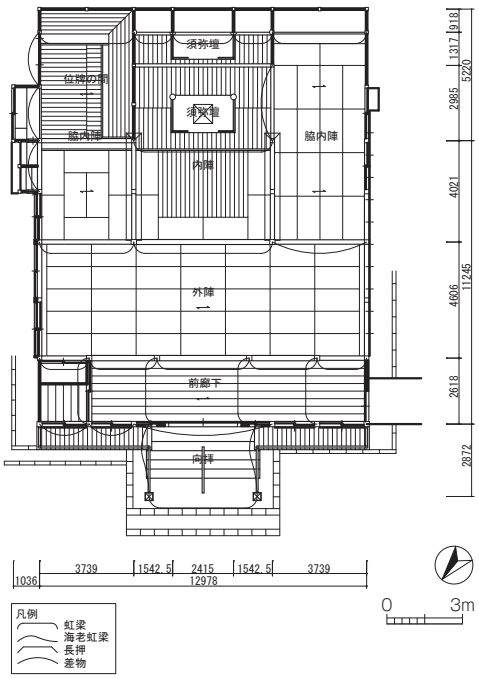


図６―９６　法然寺本堂　平面図（１：300）

正面側を「外陣」とする。南側には１間幅の「前廊下」、東西両側には１間幅の「脇廊下」を設ける。向拝柱の相対面に建つ側柱には足元に枘穴、上部に垂木掛けの痕跡が残るため、現状の向拝は後世の作と考えられる。

堂内に残る数多くの痕跡をたどり、復原考察をおこなった結果、当初の平面は四周に約４尺６寸幅の廊下をまわす形式で、「内陣」中央間が「外陣」側に突出する凸側の間取となることが判明した。このような間取は他に類例が極端に少なく、佐渡島内はもとより越後でも確認されていない。

建築年代は、記録によると慶安元年（1648）造立とされ、風化、渦巻彫刻の意匠より妥当性がある。

ｆ　天台宗

弾誓寺本堂（四町目）（図６―１０５、１０６）

桁行７間、梁間６間半、入母屋造平入、唐破風向拝１間付、桟瓦葺の建物で、西を正面とする。平面は六間取形式である。内陣東側には奥行２間の突出部が接続し、東面に１間幅の祭壇を配する。祭壇には大仏を安置する。西側には２間幅の「前廊下」を設ける。

当寺には「奉造立大佛殿　壹宇」と記す明治 40 年（1907）10 月 10 日の棟札が保管されており、堂内外の絵様彫刻は棟札の年号と整合する。

前述の報告書の中で詳細調査対象となった天台宗寺院は当寺しかない。入母屋造唐破風向拝で、外観の造形は

図６―９７　大安寺本堂

図６―９９　瑞仙寺本堂

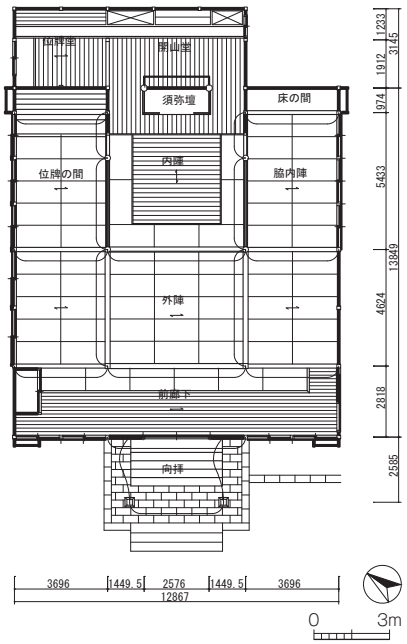


図６―９８　大安寺本堂　平面図（１：300）

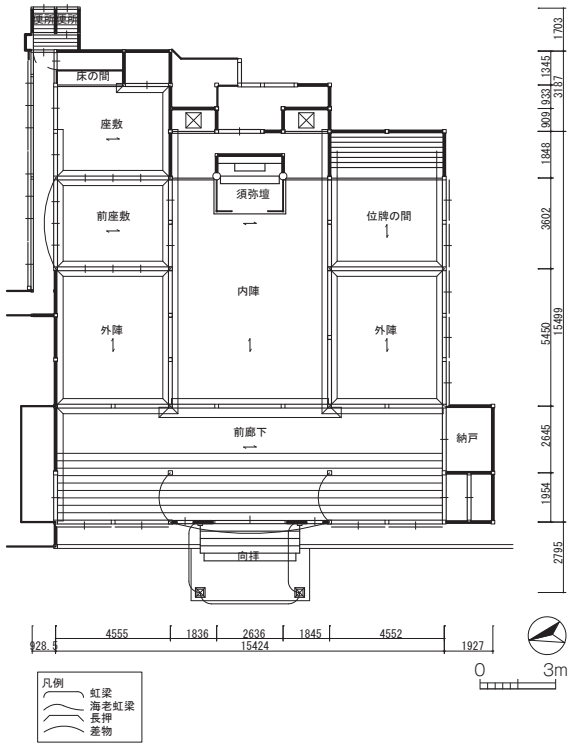


図６―１００　瑞仙寺本堂　平面図（１：300）

図６―１０１　法輪寺本堂

図６―１０３　大乗寺本堂（観音堂）

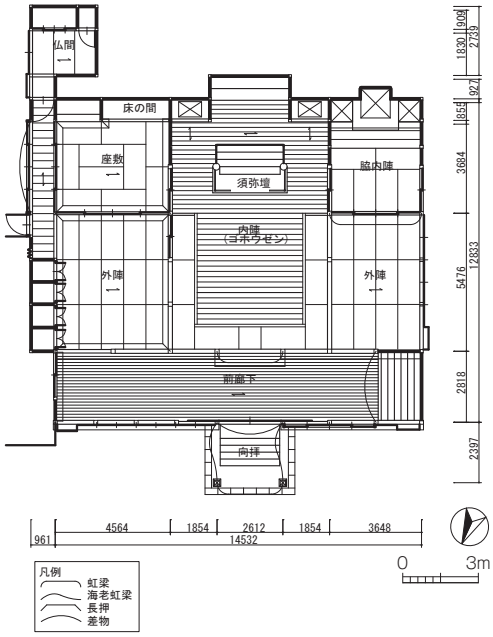


図６―１０２　法輪寺本堂　平面図（１：300）

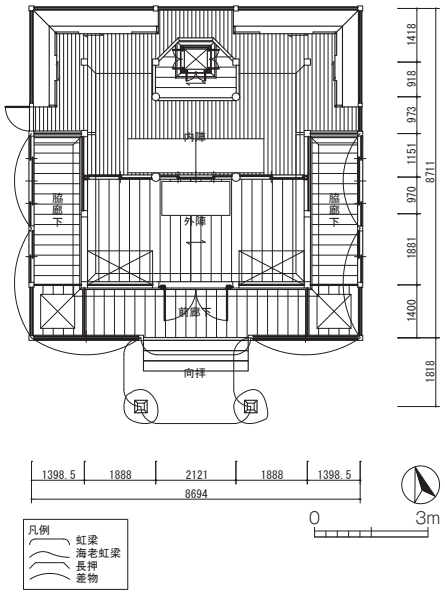


図６―１０４　大乗寺本堂（観音堂）　平面図（１：200）

図６―１０５　弾誓寺本堂

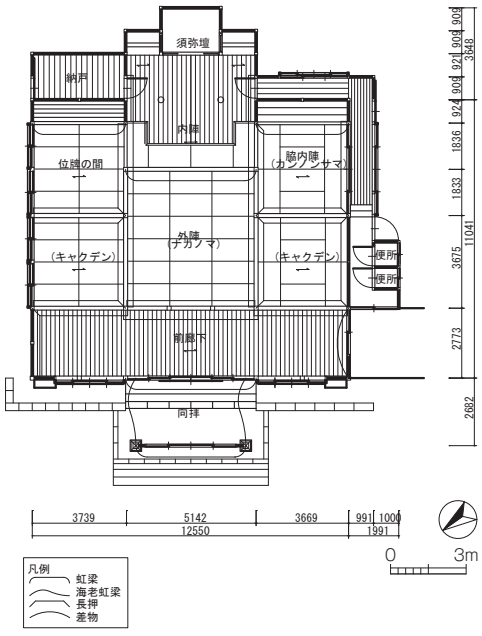


図６―１０６　弾誓寺本堂　平面図（１：200）

最上の形式とする。規模は比較的小さいが確実な手法でよくまとまった本堂である。

iii) ま　と　め

a　建築年代

相川で調査対象となった 41 棟（37 件）の建築年代は、1600 年代：３棟、1700 年代：10 棟、1800 年代：20 棟、1900 年代：８棟である。なお、前述の通り、法輪寺の来迎柱の構えは 1600 年代に遡る。前述の『佐渡市寺院建造物悉皆調査報告書』によると佐渡島内全域で 1600 年代の建築は 12 棟であった。したがって、相川は江戸時代初期の金銀山開発によって多くの人々が集まり、寺院造営が盛んであったことが窺える。

b　規　模

国中（くになか）地域には清水寺（新穂地区）、長谷寺（畑野地区）のような大規模な寺院が存在する。これは古代・中世から現在まで続く農耕による富の蓄積に大伽藍を作り上げた背景があると考えられる。

一方、地形上の要因も考えられるが、相川にはこのような大規模寺院はない。これは江戸初期から始まった鉱山の町と古代より続く国中地域の農村の時代差も原因ではないだろうか。

参考事例として前述の清水寺（新穂地区）を挙げる。清水寺では近年境内の建物調査がおこなわれた。当寺の大伽藍は新穂銀山の繁栄によるものとされてきたが、調査の結果、現存する建物は鉱山が繁栄した 100 年から 150 年後の作であることがわかった。また、昭和８年（1933）の「地主別所有賃貸価格調査」によると、清水寺は島内有数の田畑を有していたとされる。当寺は大野川扇状地の要となる位置にあり、その優位性をもちながら永年の田畑経営による富の蓄積がおこなわれ、大伽藍の造営がされたのではないかと推測される。

一方、相川は大部分が山地であり多くの田畑をもつことは難しい。そのため農耕を生業とする人は少なく、大部分は鉱山関係者であったと考えられる。このことは増改築の項で再度述べる。

c　特異な平面や手法を用いる建築

瑞仙寺本堂（中寺町）と総源寺本堂（下山之神町）

本堂全体の形は他とは異なり、前廊下が両端に１間ずつ張り出している。近年に部材が新調されているが、化粧隅木の収まりをみると当初からの形状と判断できる。よって、本堂の平面は凸型となる。このような平面とした理由は定かではないが、正面の間口を広くみせるためと推測される。

大乗寺観音堂（本堂）（下山之神町）

本堂内には数多くの痕跡が残されている。これらの痕跡をたどり、考察をおこなった結果、「内陣」中央間が「外陣」側へ突出する凸型の間取となることが判明した。他に類例が極端に少ない間取で、島内はおろか越後側においても確認されていない。

瑞仙寺仁王門（相川中寺町）（図６―１０７）

瑞仙寺仁王門は 1700 年代後半の作であるが、正面側に中柱を立てず、上部に大虹梁を架け渡している。島内において、このような手法を採る仁王門は他に確認されていない。

d　須弥壇

相川では内陣に「道場形式」と呼ばれる三連横並びの祭壇形式をもつ本堂が２棟確認された。道場形式は一般的に古い形式として位置付けられており、島内では 10 棟ほど確認されている。この数は越後側と比較するとかなり多い。

島内全域では、痕跡から当初は三連横並びの祭壇であったが、後世の改造により出須弥壇形式となったとみうけられる本堂も確認されている。

e　時代差のある部材を用いた本堂

相川では建物内で時代差のある部材を用いている本堂が２棟確認された。堂内の主要部材は江戸時代初期から明治時代にわたる複数の年代の部材を用いている。これは後世の改造でなく、当初より他所からの転用材を用いて本堂の建築をした事が部材の架構より読み取れる。このことは明治元年（1868）に出された廃寺令の影響と推測される。なお、佐渡島内でこのような事例が確認されたのは相川のみである。

f　多室構成堂

ひとつの建物内に参拝空間である内陣、外陣の他に囲炉裏のある部屋や水屋などが納まる堂である。農村地域である国中地域に多く存在し、管理・運営は周辺地域の人々によっておこなわれている。国中地域とは異なり、

図６―１０７　瑞仙寺仁王門

鉱山町である相川ではこの堂は確認されなかった。

ｇ　改　造

相川に限らず屋根葺材の変更は佐渡島内全域でみることができる。多くは茅葺もしくは板葺から桟瓦葺、または金属板葺に葺替えている。

相川では向拝の増設、須弥壇まわりの改造、屋根を含む本堂背面の改造がみうけられた。調査対象物件の大部分がこれらの改造を受けており、国中地域や南佐渡地域と比較してもその率は高い。

これは金銀山繁栄による鉱山関係者からの寄進によって、その時代に合った意匠の変更や平面の改造が頻繁におこなわれたことを示しているのではないだろうか。

相川には国中地域にあるような大伽藍を構える寺院はない。しかし、江戸時代初期の建物が現存している。改造の度合は高いが、古式な手法を採る建築もある。国中地域のような農村ではなく、近世初頭から始まった鉱山町の姿が大まかではあるがみえてくる。

(2) 神社建造物

ⅰ) はじめに

ここでは平成19年からおこなわれた佐渡市歴史的建造物悉皆調査より相川市街地及びその周辺地域の神社について１次台帳より抜粋し、まとめることとする。

調査は、相川の神社建造物として32棟を調査対象とし、１次調査台帳を作成した。調査の内容は建物外部からの観察を主として台帳を作成した。台帳の内容は前述の寺院建造物調査の台帳と同一である。

調査対象である32棟は、一般的な社殿形式をもつもの、神仏習合を反映するもの、仏堂そのものなどが散見されるため、以下の通りに区分した。

ａ　複合型社殿

拝殿、幣殿、本殿とが空間としては繋がっているが、各々は屋根に大棟が設けられた分棟形式である。14棟がこの形式であった。

ｂ　単独型社殿

本殿のみが独立しており、その多くは一間社流造である。10棟がこの形式であった。

ｃ　仏堂形式

神仏習合の思想を反映したもので､仏堂形式であるが､鳥居を設ける場合がある。７棟がこの形式であった。

ｄ　その他

上記の他、金光教相川教会は住宅風の形式であった。

ⅱ) 各形式の特徴

ａ　複合式社殿

相川の気候風土である強い海風から建物を守るため外壁を下見板で覆っている。そのため、鳥居がなければ神社と判断できない物件もある。相川では、一般的な風化ではなく、部材の表面が綿状に劣化している事例が寺院建築を含めて散見された。これは塩害の影響と考えられる。多くは一間社流造の本殿を覆屋で囲うが、社殿形式として拝殿、本殿の外観をみせる場合もある。

ｂ　単独式社殿

一間社流造として独立した形式とする場合と、１棟の中に祭壇と参拝空間を設け、覆屋で囲む覆屋形式とする場合も多い。

ｃ　仏堂形式（仏堂型社殿・仏堂式社殿）

神社の名称をもちながら仏像を安置している場合と、仏堂の名称をもちながら神を祀っている場合がある。また、仏堂のかたちをもちながら、名称を弁財天や大権現とし、鳥居を設けている物件もある。

ⅲ) 個別解説

各形式の社殿から特徴のある物件を紹介する。

なお､調査は主として建物外部からの観察であるため、概要を記述するに留める。

ａ　複合式社殿

春日神社（下戸村）（図６―１０８）

平成17年に羽茂滝平より能舞台を移築したことで知られている。社殿は南北を軸とし、南より本殿、幣殿、拝殿と並ぶ。建物は北を正面とする。

本殿　１間四方、入母屋造（背面切妻造）妻入、向拝１間付、桟瓦葺の建物である。四方には切目縁をまわし、軸組、斗組、軒の仕様はよく整っている。向拝柱の面幅の大きさや海老虹梁の形状から1700年代前半の作と考えられる。

幣殿　桁行２間、梁間１間半、片流れ造平入、桟瓦葺の建物である。拝殿と同様に内外装は新しくされているが、拝殿と同時期以降の作であろう。

拝殿　２間四方、入母屋造妻入、向拝１間付、桟瓦葺の建物である。内外装は新しくされているが、柱の風化、柱の面幅より1800年代前期の建築と考えられる。

塩竈（しおがま）神社（江戸沢町）（図６―１０９）

社殿は南北を軸とし、南より本殿、幣殿、拝殿と並ぶ。建物は北を正面とする

本殿　一間社流造、柿葺の建物である。本殿は覆屋の中に安置されている。建築年代は意匠から1800年代後期の作と考えられる。

幣殿　梁間２間、桁行５間、切妻造妻入、桟瓦葺の建物である。

拝殿　３間四方、入母屋造（背面切妻造）妻入、唐破風向拝１間付、桟瓦葺の建物である。

神輿庫　梁間１間半、桁行２間、切妻造妻入、向拝１間付、桟瓦葺の建物で、北を正面とする。外観は新建材で覆われているが内部に架け渡される虹梁の断面は細く、その意匠から1700年代前半の建築であろう。

境内は比較的広く、幕末から昭和期にかけての建築が配されるが、その中でも神輿庫は古さを示す建物として貴重である。なお、鳥居には天保11年（1840）、手水石には天保12年、灯篭には天保13年の刻銘が残されている。

金刀比羅神社（五郎左衛門町）（図６―１１０）

社殿は南北を軸とし、北から本殿、幣殿、拝殿と並ぶ。建物は南を正面とするが、拝殿は地形のためか東に出入口を設けている。

本殿　一間社流造、桟瓦葺の建物である。

幣殿　２間四方、切妻造妻入、金属板葺の建物で両脇に下屋を付す。

拝殿　梁間３間、桁行４間、入母屋造妻入、桟瓦葺の建物である。

社殿は規模も大きく、拝殿は木柄も太く、様式手法も整っている。当神社には慶応３年（1867）の記録が残る。建築意匠からみても、記録の年代には妥当性がある。相川の中で最も豪快な表現をしている社殿である。

さらに同境内には拝殿から渡り廊下で接続する粟島神社がある。粟島神社の社殿は東西を軸として西寄に本殿が設けられている。本殿は最奥部の床を一段高くして祭壇とし、覆屋本体と一体として設けられている。建築年代は柱材の風化や色合いから1900年代前期と推測される。

この２社の配置や金刀比羅神社拝殿の側面に設けられた主出入口の位置は、この地区の土地の狭小さを表しているのかもしれない。

大山祇神社（下山之神町）（図６―１１１）

境内は山の斜面を削り台地を設け、社殿、社務所等を配する。社殿は南北を軸とし、南より拝殿、幣殿、本殿と並ぶ。建物は南を正面とする。

本殿　一間社流造、桟瓦葺の建物である。

幣殿　梁間２間、桁行４間、切妻造妻入、桟瓦葺の建物である。

拝殿　桁行５間、梁間２間、入母屋造平入、向拝１間付、桟瓦葺の建物である。

拝殿、本殿共に軸部斗組、軒、妻飾りは手法が整っており、幣殿も併せて外観の意匠が望見可能であり、相川では数少ない事例である。

建築年代は境内の石造物の刻銘より大正５年（1916）と考えられ、造営には当時の三菱鉱業が深く関与したとみられる。規模も大きく近代の神社建築の規範となる社殿群である。

善知鳥（うとう）神社（下戸村）（図６―１１２）

社殿は東西を軸とし、東より拝殿、幣殿、本殿と並ぶ。建物は東を正面とする。

本殿　一間社流造、桟瓦葺の建物である。

図６―１０９　塩竈神社拝殿

図６―１０８　春日神社拝殿

図６―１１０　金刀比羅神社拝殿

幣殿　梁間３間、桁行４間、切妻造妻入、桟瓦葺の建物である。

拝殿　桁行３間、梁間３間、入母屋造平入、向拝１間付、桟瓦葺の建物である。

拝殿の外観には風除けの下見板はなく、社殿としての意匠をみることができる。本殿は一間社流造で、竪羽目板張で軒より先を覆っているため破風板及び妻飾りのみが望見できる。

堂内に残る寄付者名板及び竣工記念写真より本殿及び拝殿の建築年代は昭和 28 年（1953）であることが明らかである。幣殿は記念碑文より昭和 12 年の建築である。すべて昭和期の建物であるが、様式建築としてよく整っている。

b　単独型社殿

１棟の中に祭壇または本殿を設け、その中に参拝空間をもつ場合と本殿のみが独立する場合がある。

稲荷神社（下戸村）（図６―１１３）

稲荷堂　桁行２間、梁間３間、向拝１間付、切妻造平入、桟瓦葺の建物で、北を正面とする。内部は踏込の土間と参拝空間にわけられ、南面中央には突出型の祭壇を設ける。建築年代は部材の風化及び色合いから、1900 年代前期と考えられる。

北野神社（大工町）（図６―１１４）

本殿　一間社流造、板葺の建物で、南を正面とする。比較的広い拝殿、幣殿を設け最奥に本殿を安置し、これを１棟とする。本殿は本体とは別にした一間社流造であるが脇障子より背面の屋根はなく、特異な形式である。本殿は絵様から 1800 年代中期の作と推測される。拝殿は平成期の作である。

稲荷神社（江戸沢町）（図６―１１５）

社殿　一間社流造、金属板葺の建物で、西を正面とする。塩竈神社境内の北寄の位置にある。内法長押は和釘で留められ、軸組、斗組ともに整った様式を持ち、全体の姿も均整がとれている。また、軒は二軒平行繁垂木である。部材の風化や絵様より 1800 年代中期頃の作と考えられる。

高任（たかとう）神社（宗徳町）（図６―１１６）

本殿　一間社流造、金属板葺の建物で、西を正面とする。相川鉱山の近代化への道を大きく切り開いた大島高任を祀った社である。様式は良く整い、全体の

図６―１１１　大山祇神社拝殿

図６―１１２　善知鳥神社拝殿

図６―１１３　稲荷神社稲荷堂

図６―１１４　北野神社本殿

形も均整がとれている。風化より 1900 年代前期の作と考えられる。

c　仏堂形式

二ツ岩神社（下戸村）（図６―１１７）

御堂　桁行６間　切妻造平入、向拝１間付、桟瓦葺の建物で、南を正面とする。内部は参拝空間と祭壇部に分けられ、日蓮上人の木造を安置している。境内には日蓮宗の教会所であったことが書かれた石碑が残る。社殿は絵様や風化より 1800 年代前期の作と考えられる。なお、社殿正面には朱塗りの鳥居が設けられており、社殿内には御神燈が書かれた提灯が吊り下げられている。

百足山（むかでやま）大権現（下相川）（図６―１１８）

権現堂　６尺四方　入母屋造（背面切妻造）妻入　桟瓦葺の建物で、南を正面とする。急峻な石段を登り権現堂に至る。途中素木造の鳥居が２基設けられている。正面には大扉を設け、内部は参拝所と一段高い祭壇が設けられ宮殿を安置する。伝えでは昭和 51 年（1976）の建築とされる。

iv）ま　と　め

a　建築年代

調査対象の中で、春日神社本殿（下戸村）、風宮神社本殿（柴町）、八幡宮本殿（下山之神町）、塩竈神社神輿庫（江戸沢町）、観音堂（下相川）の来迎柱まわりは 1700 年代の建築と考えられる。上記５棟以外は 1800 年代から昭和戦後期に至る建築と推測される。この背景については別項で記述する。

b　規模

相川では、江戸時代初期に発見された相川金銀山の開発による急激な人口の増加のため神社も数多く創立されたと考えられる。しかし、度津神社（羽茂地区）や日吉神社（新穂地区）のような比較的大きな規模の神社は存在しない。これは急峻な地形が多い場所であることや、国中（くになか）や南佐渡地域のような農耕による古代中世からの歴史をもつ地域ではないことが要因と考えられる。

c　社殿の進化

社殿の機能は、祭神を祀る、神官が宗教儀礼をおこなう、参拝者が礼拝をおこなうの３機能で成立する。

図６―１１５　稲荷神社社殿

図６―１１６　高任神社本殿

図６―１１７　二ツ岩神社御堂

図６―１１８　百足山大権現権現堂

越後での調査事例では、社殿に残る痕跡の復原考察の結果、建立された当時は１棟の社殿を建て、この中に上記３機能を納めていたが、時代が下るにつれ、この社殿の背面側に幣殿、本殿を増設し、本来の社殿は拝殿として正面に向拝を付加する事例が散見された。

しかし、今回の調査ではこのような事例は確認されなかった。これは基本的には外観調査であったこと、内部の観察が可能であっても新建材に覆われていたことが主な要因であるが、境内が比較的狭いため増築をすることが容易ではなかったといったことも考えられる。

ｄ　改造と改築

現況の社殿の屋根は桟瓦葺、または金属板葺である。建立当初は茅葺､板葺であったと思われる社殿もあるが、現状でこれらの屋根葺材の社殿は１棟も確認されなかった。

次に改築について考察する。

事例として、複合型社殿を取り扱う。前項で記述した通り３機能が一連の空間で繋がるが、屋根の大棟は別れている複合型社殿の中で建築当初からの姿を保っているものは大山祇神社（下山之神町、大正５年＝ 1916 建立）と､金刀比羅神社（五郎左衛門町､慶応３年＝ 1867 建立）の２件のみである。金刀比羅神社は粟島神社と渡り廊下で繋がるが、名称、建築年代が異なるため粟島神社は別件として取り扱う。

その他の社殿は旧来の本殿を覆屋に納め、幣殿と拝殿を改築している事例が大部分である。また、上記事例の中には拝殿と幣殿の改築年代が異なる場合もある。

このような事例の背景には、寺院本堂に比べ各社殿の規模が小さく、かつ各機能毎に改築が比較的容易であることが要因として考えられる。そして、金銀山繁栄による経済の豊かさも背景にあると予想できる。

今回は外観の観察を主としたが、今後詳細調査が望まれる。あわせて島内各地との比較研究をおこなうことにより、より深く相川地域の状況が鮮明になると予想される。　（山崎完一）

第３節　小　結

ひとが地域に住まうという行為は、空間・土地と建物の使い方や形態に反映され、それは町並みとして結実する。第４章及び第５章において、相川における空間・土地利用について検討をおこなってきたのに対し、本章では特に家屋及び寺院建造物という観点から相川の建物の文化史的位置づけを明らかにし、加えて、前章までの検討も踏まえ、土地利用や生活・生業の総体としての相川のまちや町並みの展開と特質についてまとめた。

まず、相川の町並みにおける歴史の積み重ねられ方について、歴史的変遷と現状について分析した。歴史的建造物の残存状況からは、相川に分布する多様な種類の建物形態を確認することができる。そして、現況の残存状況に限ってみれば、上町では少なくとも一部が接道し、庭を有するが、隣の家とは接しない「屋敷型町家式」、もしくは接道せず、庭を有するが、隣の家と接する「準屋敷式」の割合が高いことが指摘された。他方で、町北部及び南部では少なくとも一部が接道し、隣の家とも接している「準町家式」の割合が高いことがわかる。

屋敷型町家式が、上町の先端部及び二町目・三町目に多く分布していることが明らかになったことは、前者にはかつて地役人や鉱山経営者等が多く居住しており、後者には廻船業などで栄えた商人が居住していたという歴史的な背景とも重なり、興味深い。こうした点は、第４章で指摘したような、エリアごとに異なる役割・性格を担っていたという相川の特徴に建物も無関係ではないということを示す重要な証左であろう。

また、相川の町並みについて俯瞰していくと、地形や気候などの自然的要因、大久保長安ら佐渡奉行を中心におこなわれた町立て、そして近世から現代に至るまでの鉱山や商業を中心とした生活・生業など、相川をとりまく諸要件が密接にかかわるなかで、家屋や町並みが形成されたと理解できる。例えば、屋根瓦だけをみても、セメント瓦普及の要因として、主原料が浜砂であることやセメント瓦の凍害・塩害に対する耐久性など、相川の環境との深い関係性が考えられ、それが現在のセメント瓦と焼瓦が混在する町並みに帰結していることがわかる。

相川の町並みが建物のみならず、地域の広い文脈のなかで読み解けることは極めて重要である。鉱山住宅にせよ、商店街にせよ、鉱山の休山とともに大きく変容し続けている。それも、鉱山都市である相川に課せられた文脈のひとつとして理解し、歴史的文脈を踏まえ、よりよい地域像を模索していくことが望まれる。

また、本章後半では、家屋と寺院建造物について、建築史的観点からの検討をおこなった。

家屋については、新潟本土では妻入町家が優勢なのに対し、佐渡では平入町家が優勢であることから、その外来性が指摘される。さらに、上町では平屋建を主体とする階高の低い町家が多くみられ、また、ナンドをもたないという特徴がある。こうした点も、新潟本土の中越・下越地方での形式とは異なっており、京都の町家形式との類似性が指摘された。相川における文化的繋がりを考える上で重要である。

他方で、下町（特に南部）では２階建の卓越と土蔵保有率の高さが家屋台帳等の分析からも確認できた。土蔵所有を富裕層の指標とすれば、地域の性格と建物の対応を読み取れる。商業活動の進展に伴って町家家屋も発展したと理解することができる。

寺院建造物についても、相川という地域の歴史的展開と結びつく特性を読み取ることができる。相川の寺院は国中（くになか）の農村と比して大規模寺院が少なく、その理由として、地形的な制約に加えて、相川は近世以降、国中は古代から続くという歴史的な要因が指摘された。また、一部の寺院では、鉱山関係者からの寄進によって時代に合った意匠の変更や平面の改造が頻繁におこなわれたことも建築調査の結果から指摘された。こうした点は、第５章第１節で指摘された事実とあわせて、鉱山都市における信仰及び生活と寺院の関係を考えるうえで、重要である。

（奈良文化財研究所景観研究室）